

平成17年度修士論文

ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』—ハイパーテキスト論考

言語文学専攻

指導教員 安藤 厚

学生番号 05043079

氏名 桃井 富範

目次

0. 序論

1. 主人公のモデル研究

1-1. ドミートリー=Аполлон Александрович Григорьев

1-2. グルーシェニカ=Агрипина Ивановна Меньшова

1-3. 現実世界と小説世界との差異—『ロマン的世界』の成立

2. 名前の意味論からの考察

2-1. ドミートリー=デーメーテル

2-2. グルーシェニカ=梨Груша

2-3. 農耕のメタファー（カンディード）

3. ドストエフスキーと資本主義

3-1. ロシアにおける農奴解放と資本主義

3-2. 金銭が作品の外面的プロットを支配

3-3. 作家たちの実情

4. アポロン=グリゴリーエフ及び土壌主義Почвенничество研究

4-1. ロシアにおけるインテリゲンツィヤ

4-2. ロシアにおける保守主義思想

4-3. グリゴリーエフとドストエフスキーの交流について

4-4. 土壌主義の概念の起源について

4-5. 土壌主義の現象の本質

4-6. 土壌主義の4つの特徴

4-7. 土壌主義についての総括

4-8. 「大地」と「世界」

5. ドストエフスキーにおけるシェリング的問題

5-1. ロシアにおけるシェリング受容

5-1-1. 定着の要因

5-1-2. ロシアにおける導入

5-2. ドストエフスキーにおける間接受容

5-3. グリゴリーエフの有機的批評

5-3. 無底の変容

5-3-1. 無底（Ungrund）概念

5-3-2. 無底（Ungrund）から無底（бездна）へ

5-4. 『カラマーゾフの兄弟』における解決

6. カラマーゾフシナКАРАМАЗОВЩИНА
- 6-1. マドンナ（聖母）の理想
- 6-2. ソドムの理想
- 6-3. マドンナの理想、ソドムの理想両者の肯定
- 6-4. カラマーゾフシナとロシアの大地の同一性
7. 作品内における神概念の機能
- 7-1. 贈与の問題
- 7-2. 神の機能＝純粹贈与を可能にする
- 7-3. 自己所有化への帰結（神の死）
- 7-4. 超越概念に関する考察
- 7-5. 「愛」と進化ゲーム理論
- 7-6. 社会的様態に関する考察
- 7-7. 罪の意識の形成
8. 結論

0. 序論

現在文学理論において、〈間テキスト性〉という用語が大きな流れの一つとして存在する。その主張によれば、読むという行為は、我々をテキスト同士の相互関連の網の中に投げ込むことだ。そのような相互関連を辿ることこそがテキストを解釈すること、テキストが保持している意味や複数の意味を見つけ出すことなのだ。意味とは、あるテキストとそれが言及し関連を持っているほかの全てのテキストとの間に存在する重要な何か、ということになる。そうなった時のテキストが、〈間テキスト〉なのである。

修士論文においては、『カラマーゾフの兄弟』を、1つの〈間テキスト〉として着目し、ドストエフスキー研究者達の研究書（テキスト）に留まらず、文学、哲学、歴史学、経済学、社会学等の学術的概念としては区分されているテキストをも包含した、考察及び論考を行いたい。ゆえに修士論文の副題として、ハイパーテキストという言葉を使用しているが、文学理論と結びついた用語としては、上述した〈間テキスト性 Intertextuality〉、〈超越テキスト性 Transtextuality〉（ジュネット）等が存在するが、日本においてはこれらの文学理論に関する用語が統一されていないようであるので、一般にインターネット用語として通用されているハイパーテキスト¹という概念を用いている。本論文で『カラマーゾフの兄弟』をその研究主題としているのは、今作品がロシアだけにとどまらない西欧文学の影響をふんだんに取り入れ、また後の世界の文学・思想に少なからぬ影響を与え続けているからである。『カラマーゾフの兄弟』というテキストが、非常に多くの下部テキストの上に成り立っており、例えば聖書も、ドストエフスキーの下部テキストの一つであり、しかも多くの配分を占めるものであることはよく知られている。現在では『間テキスト性』という概念からの文学の研究方法が一つの主流となりつつあるが、修士論文では、『間テキスト性』そのものについて分析するものではなく、間テキスト的なテキストの横断を行うものだ。

また、本論文の研究主題として主にドミートリー＝カラマーゾフとグルーシェニカとを

¹ハイパーテキスト＝コンピュータを利用した文書システムの一つ。文書の任意の場所に、他の文書の位置情報(ハイパーリンク)を埋めこみ、複数の文書を相互に連結できる仕組みのこと。

専用の閲覧ソフトウェアを使って文書を表示すると、リンクをたどって次々と文書を表示することができる。リンク機能を使って静止画や動画、音声、音楽など、様々な情報を一つの文書の中に埋めこむことができるシステムもある。

ハイパーテキストを応用した製品としてはApple社のHyperCardなどがある。インターネットを通じて構築されている世界規模の巨大な文書システムであるWWWもハイパーテキストの一つである。

(<http://e-words.jp/w/E3838FE382A4E38391E383BCE38386E382ADE382B9E38388.html>)

挙げているが、それはドミートリーがラスコーニコフと同様に殺人という極限的状況を経て、苦悩の遍歴を行い、刑罰を負い、《転換》を経験する人物であると同時に²、その愛のプロットの中に超越概念（神）の持つ機能、あるいはその欺瞞をとく鍵が隠されているからである。その内容については研究8の作品内における神概念の機能において後述する。

1. 主人公のモデル研究

・小説が人生に似ているというよりも、人生のほうがもっとよく小説に似ている。

—ジョルジュ・サンド

モデル研究とは、ドストエフスキーの創作のモデルとなった実在した人物たちに関する研究をさすものだ。³ドストエフスキーによるテキストが多く下部テキストを含んでおり、その下部テキストを探ることは、ドストエフスキー研究の大きな主流のひとつであり、主に過去のヨーロッパの文学テキストという側面においてはRobert.L.Belknap⁴によって網羅的な研究がなされており、またロシアにおいても多くの研究が行われていた。また、日本においてもそれらの先行研究の紹介がされている。純粋な文学テキストがドストエフスキーの文学テキストに与えた影響を調べていくということは意義深い作業の一つであろうが、ドストエフスキーが影響を受けたテキストというものは大体において西ヨーロッパのものであり、すでに西ヨーロッパ及びロシアで十分過ぎるほどの研究がなされている上に日本においても先行研究の紹介がされているので、本論文の研究対象からはあえて除くことにした。

しかしながら純粋な意味での作者によって書かれたテキストの他にもドストエフスキーの創作には、当然のことながらドストエフスキーの生きていた特定の社会状況において彼が影響を受けていた全ての事象が彼の作り上げた文学テキストに影響をおよぼしていた。その典型的なものの一つとして作品内の主人公のモデルとなった実在上の人物が挙げられる。本論文においても卒業論文と同様に『カラマゾフの兄弟』におけるドミートリーという主人公のプロットを中心に取り扱っていくわけだが、その作品プロットに影響をおよぼした実在上の人物が研究されている。このような実在上の登場人物の研究に関しては、日本にも先行研究の紹介は存在するが、本論文のテーマと関係する範囲で取り扱うことに

²Хорст-Юрген Геригк Достоевский и Хаидеггер. Эсхатологический писатель и ЭСХОТЛОГИЧЕСКИЙ МЫСЛИТЕЛЬ. сост. Тоефуса Киносита. редактор Карен СтепанянXXI век глазами Достоевского. перспективы человечества. Москва. "Грааль". 2002. С. 109.

³ドストエフスキー作品全体におけるモデル研究に関してはНиколай Николаевич Наседкин. ДОСТОЕВСКИЙ энциклопедия. Москва. Алгоритм. 2003の中で網羅的な研究がなされている。

⁴Robert. L. Belknap. The Genesis of the Brothers Karamazov. Northwestern University Press Studies of The Harriman Institute. 1990.を参照。

する。この研究の動機は、いささか個人的ではあるが、私が卒業論文執筆の際に実行を目標としたドストエフスキーの小説世界を現実化しようという企てが十分に実現できなかったという反省を基に、今研究では、まず第一にドストエフスキーの創作のモデルとなった人物達についての研究を行い、その人物達の人生と、現実との差異を検証し、その説明付けを行うということを目的としている。

1-1. ドミートリー=Аполлон Александрович Григорьев

ドミートリーのモデルとしては無実の囚人であるイリンスキー、批評家・詩人であるグリゴリエフが主に挙げられている⁵。

まずドミートリー・カラマーゾフのモデルの1人として挙げられているイリンスキーについて触れておきたい。＜ドミートリー=イリンスキー=ニコラーエヴィチはオムスク監獄の囚人である。退役した少尉であり、貴族だったが1848年の6月17日に監獄に拘留される（1年半ほどドストエフスキーよりも早い）。6等官であった自分の父親の殺人容疑で20年の刑に処せられるが10年後になって殺人犯が彼ではないということが明らかになる。『死の家の記録』の中で同様の事がイリンスキーについて触れられている。＞⁶ロシア語文献ではИ.Д.Якубович.によってドミートリー=カラマーゾフとの関連性が指摘されており⁷、プロットの類似だけではなく、両者の性格の類似、そして『カラマーゾフの兄弟』に登場するモークロエ村の起源として、イリンスキーの殺人容疑の現場となったモークロエ居酒屋が挙げられている。また、Belknap氏によってもドミートリー=カラマーゾフのプロットの源流になったものの1つとして研究されている。その中では、ドミートリー=カラマーゾフの父親殺しと冤罪のプロットはイリンスキーの物語をメロドラマ化したものであるという指摘がなされている。

さて、本論文で主に取り上げるアポロン=グリゴリエフであるが、彼は日本においては一般的にはほとんど知られていない作家であろうから、まずその紹介から始めておく必要があるだろう。

＜詩人、批評家、翻訳家、長篇『あなたが私と話してくれさえすれば』、『ジプシーの踊り』の作者。1846年に、彼はロシア文学における「貧しき人々」の現れを評価した最初の1人だった。（Ведомость С.Петербургской городской полиций.1846.но33.финский вестник.1846.но9）その後、「白夜」を高く評価し、非難されていた「主婦」を好意的に批評した。（РСЛ.1859.но5）それゆえに、1860年の初頭にグリゴリエフとドストエフスキーが個人的に知り合ったとき、彼らはすぐに懇意になった。彼は、土壌主義の主な宣伝

⁵Николай Николаевич Наседкин. (2003). С. 272.

⁶Николай Николаевич Наседкин. (2003). С. 604.

⁷И.Д.Якубович. Братьях Карамазовы и следственное дело. Д.Н.Ильинского // сборник. Ред.коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. Достоевский Материалы и исследования том4. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. том2.を参照されたい。

活動家の一人となり、「ブレーミヤ」の寄稿者となった。実際はドストエフスキーの兄弟達とのいさかいや、個人的な事情が原因で（ワインへの愛着、借金）、彼はまもなく首都から離れ、一年間（1861年5月から1862年5月まで）オレンブルグで生活し、教師として働き、そこから手紙を「ブレーミヤ」の協力者である Н,Н,Страхова に宛てた。そこから戻ってからは、再び雑誌の仕事に参加した。「ブレーミヤ」と、その後の「エポーハ」の中で、土壌主義的な方向性の論文である「民衆と文学」、「ロシア文学における西洋主義」、「ロシアの批評家を目の前にした高名なヨーロッパの作家達」、「ベリンスキーと文学における否定的見解」、「本能的な批評家のパラドクス」などが出版された。

ドストエフスキーは何度となくグリゴリエフを誘い、彼の支えとなった（何度となく問題が悪質滞納者用監獄にまで至ったのである）し、自分の協力者の突然の死を体験もした。1864年の9月25日だった。兄と妻の死に続いての事だった。恐らくもつとも十分にグリゴリエフへの自分の矛盾した態度と詩と批評の性格の矛盾を以下の言葉で表している。「グリゴリエフは世界じゅうどこの編集部にも席をおいても、完全に安心して腰をすえることはできなかったに相違ないと、わたしは考える。もし自分の雑誌をもっていたら、創刊してから5ヶ月くらいで、自分ですっかりそれを台無しにしてしまうにちがいない。

しかしながらグリゴリエフのこれらの書簡によって、彼の要求はどのような深さに達したものであったか、また生涯を通じて自分自身の志向と信念をどんなに真剣に、そしてきびしい目でながめていたかということはもとより、彼がどんなに正直で、誠実きわまりない作家であったかを、一般読者と文学界がこれまでよりもさらにはっきりと知ることができるものと、私はたいへん喜んでいいる。」⁸

グリゴリエフはДОСТОЕВСКИЙ энциклопедияにおいてドミートリー＝カラマーゾフのモデルとして紹介されており⁹、またВ.Г.СелитренниковаとИ.Г.Ягушкинによっても両者の比較がなされている¹⁰。その論文によると、まず第一にグリゴリエフは、完全な意味でのドミートリー＝カラマーゾフのモデルではないと前置きした上で、ドミートリーの中に、性格的な大きな類似が見られ、両者の結びつきが十分に密であるという。その類似性としてはドミートリー＝カラマーゾフにおいて有名だったマドンナの理想とソドムの理想といったような二項対立する二つの深淵Две бездныがアポロン＝グリゴリエフにも見られるということや、また両者に存在するハムレット性や、その渦巻きのような感情のリズムの類似、苦悩するロシア民衆に関する思索についての共通点が見られると指摘されている。また、《大地と人間との結合》と定義されているある種の道徳的伝統に関しても、

⁸Николай Николаевич Наседкин. (2003). С. 562-563.

⁹Николай Николаевич Наседкин. (2003). С. 272.

¹⁰В.Г.Селитренникова, И.Г.Ягушкин. АПОЛЛОН ГРИГОРИЕВ И МИТЯ КАРАМАЗОВ. Научные доклады высшей школы. Филологические науки. Министерство высшего образования СССР 1969, 1. Москва. Высшая школа

ドミートリーが『どうやってこの俺が大地ととわの契りをむすぶかってことだよ』（14, 99）¹¹と質問していることと同様の発言がグリゴリエフにも存在していたということが指摘されている。また、女性との恋愛における破滅性においても類似点が指摘されており、イタリアからの手紙の中で彼は何度も何度もМулильоの絵画に出てくるような理想的な女性像について触れている。そしてそれと同時に彼は、「女性に関するあこがれ」を消し去る事が出来なかった。ルーブル美術館で彼はミロのヴィーナスに、自分に「放蕩の売買（売春婦）ではなく、女性一巫女」を送ってもらうように祈っている。逆上のカラマーゾフの感情が、彼の手紙の中で、ミーチャのグルーシェニカ女王への讃歌のようにほとんど明確とすら言えるように聞こえるという。「正直に言って、私は最後の4年間で、あらゆることをした。あらゆる下劣な行いをしたし、それはまるで一人のピューリタンのような高潔な女のためにすべての女に復讐するようなものだった。私は時々彼女を、最低なほど、自虐的なまでに愛するのだ。彼女は私を高揚させる唯一のものでありながらも、しかし…。」

12

ロシアにおけるロマン主義者像を、ドストエフスキーはアポロン＝グリゴリエフによって見て、知り、それを後になってドミートリー＝カラマーゾフによって作り出したということが最後に結論付けられている。

この論文を検証していくと、二つの深淵Две бездныはドイツの神秘思想家であるベーメ、シェリングを経て、ロシアにおいてアポロン＝グリゴリエフらに受容され、ドストエフスキーへと伝わって『カラマーゾフの兄弟』のドミートリーという主人公像の中で表現されたものであるということがわかってきた。この無底概念のロシア及びドストエフスキーへの伝達については後に述べたい。また両者におけるハムレット性という点では、『注釈「N・ストラホフの「アポロン・アレクサンドロヴィチ・グリゴリエフの思い出」に寄せて」』の中で、「グリゴリエフは真のハムレットではあったけれど、しかし彼は、シェイクスピアのハムレットにはじまり、わがロシアの、現代のハムレットあるいはハムレットの亜流に終わるハムレットの仲間のうちで、他の誰よりも意識が分裂していない、他の誰よりも内省することのすくないハムレットの一人であった」（20, 136）とグリゴリエフのハムレット性が強調されている。ドストエフスキーとシェイクスピアに関してはЮ.Д.Левинの論文の中で詳しいが¹³、『カラマーゾフの兄弟』のコンコーダンスからГамлетハムレットという単語を探っていくと、大文字と小文字を合わせて5箇所におい

¹¹『カラマーゾフの兄弟』の引用に関しては、（ ）内にПолное собрание сочинений в тридцати томах. Ф.М. Достоевский. глав. ред. В.Г. Базанов. Ленинград. 1972-1990. の巻数・頁数を記す。

¹²А.Григорьев. Лителатурная критика. С. 171-172.

¹³Ю.Д.Левин. Достоевский и Шекспир // сборник. Ред.коллегия:В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том4. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. том1.を参照されたい。

てその言葉が登場する。その中でも注目したいのが、検事イッポリートがドミートリーの性格を描写した時に述べる台詞である。

я не знаю, думал ли в ту минуту Карамазов, "{и что будет там}", и поможет ли Карамазов по-гамлетовски думать о том, что там будет? Нет, господа присяжные, у тех Гамлеты, а у нас пока Карамазовы!"

(15, 144-145)

その瞬間カラマゾフが『その先に何があるか』と考えたかどうか、またカラマゾフがハムレット的に、その先に何があるかを考えたりできるのかどうか、わたしにはわかりません。そう、陪審員のみなさん、ハムレットはあちらの話で、わが国では今のところカラマゾフなのであります。

ドストエフスキーが **Гамлет** ハムレットという言葉を用いた時に、その言葉を媒介にしてドミートリー=カラマゾフとアポロン=グリゴリエフがドストエフスキー自身の意識の中においても2重に重なっていただろうと考えることができる。

また、ドミートリー=カラマゾフとアポロン=グリゴリエフの両者に共通する大地との結合への願いという点でも、研究を行っていくうちに、ドストエフスキーが雑誌『時代 **Время**』を編集時に当時のスラブ派と西欧派の折衷的イデオロギーを持つ土壌主義という論陣を張っており、大地との有機的統一性は、その大きな理念の一つとなっていたことも明らかになっていった。この点については後に述べる。

グリゴリエフは、完全な意味でのドミートリー=カラマゾフのモデルではないという点についても、ドミートリー=カラマゾフという1つの主人公に対してそのモデルとなった人物が複数挙げられているだけではなく、さらにその主人公が織り成すプロットにはジョルジュ=サンド、ヴィクトル=ユゴー、シェイクスピア、シラー、レールモンツフなど数多くの作家が影響を与えていることも鑑みると、1人の作家、作品、そして大きく捉えるところのドストエフスキーという一個人に対して特定の唯一の影響作用のみを特定し断定することは不可能かつ無意味ではあるが、以上の点から鑑みても、ドミートリー=カラマゾフという主人公論を造形した際に、ドストエフスキーの脳裏にアポロン=グリゴリエフという主人公像が存在していたということは恐らく間違いないだろう。

1-2. **Глур-Шеника=Агриппина Ивановна Меньшова**

次に『カラマゾフの兄弟』における主要なヒロインの1人であり、ドミートリー=カラマゾフとのプロットにおいても重要な役割を示すグルーシェニカのモデルについても研究を行ってみよう。

ДОСТОЕВСКИЙ энциклопедияによると、Агриппина Ивановна Меньшова

は《カラマーゾフの兄弟》におけるグルーシェニカのモデルとなっている。¹⁴彼女もまた、当然のことながら日本では全く知られていない作家であるから、まずはその紹介から行っていくことにしよう。

＜Агриппина Ивановна Меньшоваは、スターラヤ・ルッサでドストエフスキーと知り合う。彼女の名前は、作者と妻との手紙の中で触れられている。А.Г.Достоевскаяは恐らく、心からメニショバによって寵愛を受けていたのだろう。彼女はКоровайкинという中尉の事を愛していた。その中尉はペテルブルグに去り、彼女に手紙を送ることをやめてしまった。少女は、アンナ・グリゴリーевнаに、彼に何が起こったかを知るための手紙を書いたのである。しかしながらあとになってメニショバは、スターラヤ・ルッサの連隊の分隊の将校に嫁に行き、Шерという人の妻となった。何年か後に彼女は夫を失い、А.Г.Достоевскаяは彼女のために年金を請願した¹⁵。

ここであらかじめ述べておきたいのは、スターラヤ・ルッサが長編小説のモチーフの1つとなっていたということだ。リュボーフィは『カラマーゾフの兄弟』の事件が起こるスコトプリゴニエフスクという町の地形は、スターラヤ・ルッサの特徴を映して、カラマーゾフ老人の家はグリッペ大佐の別荘によく似ていると証言している。住民の何人かは小説に登場している。たとえば、ミーチャ・カラマーゾフがジプシーたちのために食料品を買いこむ商人プレトニコフは実在の人物で、ドストエフスキーが最良にしていた商店主だった。モークロエヘミーチャを乗せていく御者のアンドレイとチモフェイは、一家のなじみであったという。¹⁶

研究を進めていくと、Л.М.Рейнусの論文によって、Агриппина Ивановна Меньшоваはグルーシェニカのモデルとしてとりあげられている¹⁷。その論文の骨子を取り上げてみよう。Агриппина Ивановна Меньшоваをグルーシェニカのモデルとして取り上げている主な理由は、「美しいグルーシェニカは一若い田舎の女性であって、私の両親達はスターラヤ・ルッサで彼女を知ったのだった」というЛ.Ф.Достоевскаяによる記述である¹⁸。Рейнусによる論文は、この記述を検証し、証明する形で行われている。その情報としては、А.И.Мосина（1878生まれ）、Е.П.Семенова（1885生まれ）、М.В.Красавин（1889生まれ）といった3人のメニショバが生きていた頃を良く知る古老達の証言と、А.П.ОрловаからА.Г.Достоевскаяへの手紙、МеньшоваからА.Г.Достоевскаяへの手紙、ノブゴロド県新聞や他の起源から汲み取られている。その中ではАгриппина Ивановна

¹⁴Николай Николаевич Наседкин. (2003). С. 645.

¹⁵Николай Николаевич Наседкин. (2003). С. 645.

¹⁶Константин・モチューリスキー著、松下裕、松下恭子訳、『評伝ドストエフスキー』、筑摩書房、2000年、P529。

¹⁷Л.М.Рейнус. О прототипе Грушенки из Братьев Карамазовых // Русская Литература 1967но4. Институтрус.литературы. А.Н. С.С.С.Р.Ленинград. Изд-во Академии наук СССР. 1967. С.143-146.

¹⁸Достоевский в изображении его дочери Л.Достоевской. ГИЗ. М.–Л., 1922. С. 77.

Меньшова自身の伝記について触れられているが、『カラマゾフの兄弟』におけるグルーシェニカとАгриппина Ивановна Меньшоваとの類似点については、まず第一にカスピ海連隊の中尉であったИван Васильевич Кроваикйнとの、グルーシェニカと類似したロマンスについて語られている。Реинусによると、このロマンスは破局したらしい。彼女のペテルブルグへの出発後間もなくして婚約者からの手紙は到着しなくなった。絶えず彼を愛していたГрушенька МеньшоваはА.Г.Достоевскаяに助けを求める手紙を書いている。

「親愛なるАнна Григорьевна！あなたの私に対するありがたい好意を知った上で、すてきなあなたにお願いがあります。実はペテルブルグからの到着後私は重い病気になってしまって、その病気の間に私の婚約者からたった一つの手紙を受け取ったきりで、その手紙もとても悲しいものなのです。—彼もまた病気で、ベッドでこれを書いていて、入院しなければならなくて、その後は、私は彼に何があったのかどうか、生きているかどうか、それさえもわからないんです。そこで、いとしい人よ、私のために、もしよければ、最もつらい真実も、私にとっては何もわからないよりはましです。彼の住所は以下のとおりです。クロンシタット、カスピ海連隊、Иван Васильевич Кроваикин、恐らく中尉です。」¹⁹

その手紙に対して、А.Г.Достоевскаяは、Меньшоваの願いを果たしている。情報をもたらしたのはДостоевскаяの従兄弟の兄弟のА.Н.Сниткинであった。心配されていた中尉は、生きていて元気であり、書き付けを送っている。そこには「下に署名されている、あなたの恭順な僕は、なぜ連隊の管理局に私の住居に関して情報を得ようとした、Александр Николаевич Сниткин氏の関心を得ているのかということに関して通知させていただきたい。」²⁰Меньшоваと中尉との関係は、見たところ、終わってしまったようだ。

長篇の中では、グルーシェニカは、「まだ17歳だった頃に何処だかの将校だったらしい誰かに騙され、その後すぐに捨てられている。」(14, 311) Меньшоваも同様に誘惑され、その将校であり中尉である男に期待を裏切られた。騙された女性の悲劇が、ドストエフスキーがグルーシェニカのモデルを創作する基礎と、小説で語られるほかの登場人物たちとの彼女の関係の基礎となっていて、全ての要因を決定している基本となっている。

また、ドストエフスキー自身がАгриппина Ивановна МеньшоваのことをГрушенька Меньшоваと呼んでいる手紙も存在する。1879年の夏、А.Г.Достоевскаяは、風光明媚な場所として知られているСтолбенский島のСелигер湖にあるНилова修道院に子供達と共に集まった。Меншоバも行きたくなくなった。事は決まった。「Грушенька Меньшоваの訪問を、Нилова修道院への旅行の前置きとしたい。」ドストエフスキーはЭмсから書いている。²¹

さらに、小説では、グルーシェニカは、Соборный通りに住んでいて、つまりは大聖堂Соборに近い。Меньшоваも大聖堂に遠くない、Соборный区域の、大きくはない2回建

¹⁹В письме А.П.Орловой от 18 ноября 1876 года.

²⁰Записка от декабря 1876 года хранящаяся в письмах А. П. Орловой.

²¹Ф.М.Достоевский. Письма. т.IV. С. 76.

ての石造りの家に住んでいた。

また、興味深い事に、当時のノブゴロド県新聞において、「カラマーズフの兄弟」の中で、グルーシェニカのパトロンであった人物と同姓同名である、クジマ・サムソーフについての記事が存在したということが触れられている。²²明らかにこの登場人物のモデルにはドストエフスキーの何らかの古い記憶の跡があるとのことだ。>

ドミートリー＝カラマーズフのモデルであるアポロン＝グリゴリーエフと同様に、完全に唯一のモデルであるなどということは決して断言できるものではないが、しかしながらグルーシェニカというヒロインの形成において、大きな役割を果たしていたであろうことは間違いなからう。

1-3. 現実世界と小説世界との差異—『ロマン的世界』の成立

ここまで小説『カラマーズフの兄弟』の登場人物のモデルとなった実在上の人物たちに焦点をあてて研究を行ってきたが、父親殺しと冤罪のプロットについては今回触れないとしても、作品内におけるドミートリー＝カラマーズフとグルーシェニカとの恋愛プロットと、実在上のモデルとして考えられるアポロン＝グリゴリーエフと Агриппина Ивановна Меньшова のそれとの間には、明らかに差異が見られるようである。

アポロン＝グリゴリーエフは、『カラマーズフの兄弟』におけるドミートリーのような劇的な恋愛を成就させたわけではなく、むしろ異性関係において不遇の人生を送り続けていたようだ。²³

またМеньшоваも Рейнусによると、<中尉との成功に終わらなかったロマンスの後、彼女は1882年にスターラヤ・ルッサに分宿している Вильмандстранский 連隊の二等大尉である Петр Петрович Шер と結婚したが、結婚は長く続かなかった。さらに間もなくして彼女のたった一人の姉が死に、Меньшова-Шер はあまりうまくいっていない古儀式派の母親と未亡人のまま取り残された。生活は深刻になった。孤独が彼女を苦しめ、物質的な苦勞が多く奔走の原因となり、虚無や人生の見通しが立たない事が落胆の原因となった。1893年3月29日彼女は А.Г. Достоевская に宛ててこう手紙を書いている。「一つの救いが問題や心配事の中にもあるべきで、義務的な職務だけが私を救うるのです。そうでもないなら私はもう生きていけないと本当に思うのです…人生の力や魂の灯火がまだ消えきっていないというのに、自分の人生に対する意味を見つけ出せずに、誰に対しても役に立てずにいて、狂気に近い状況にさえなっています。どこか、養護施設でも子供達のところでも、病人の心配でも何でもいいから私には必要なのです、親愛なる Анна

²²Общий список местных жителей Старорусского уезда Новгородской губерний... «Новгородские губернские ведомости». 1875, 8 ноября.

²³アポロン＝グリゴリーエフの伝記としては、例えばАполлон Григорьев, Б.Ф. Егоров. Москва. Молодая гвардия. 2000. (Жизнь замечательных людей. Серия биографий. вып. 770)等を参照されたい。

Григорьевна…。」>²⁴

ベルジャーエフは、ドストエフスキーの創作、ことに彼の円熟した諸ロマンは、彼自身の魂の投影にすぎず、彼の特殊な個性の内面的内容の外面的客観化に過ぎぬとして以下のように語っている。「ドストエフスキーのすべての主人公たちは一と、われわれは、彼の書において読む—彼自身であり、彼自身の道であり、彼の存在のさまざまな側面であり、彼の苦悩であり、彼の問いかけであり、彼の受難者の体験である。そして、それゆえに、彼の創作のなかには、何一つ叙事的なものはなく、客観的生活の描写、生活の客観的形態はなく、人間世界の自然的多様性への再現の天分はなく、レフ・トルストイの強力な面を形作っているようなすべてのものはない。」そしてドストエフスキーは「最も深刻な意味での内在論者である。」と結論付けている。²⁵今回のモデル研究に関して言うならば、ドストエフスキーは明らかに作品のモチーフとして彼の周囲に存在した外的な環境からの影響を大きく受けているということは明らかであるから、ベルジャーエフのこの見解に対しては完全に賛成することは出来ないが、しかしながらそのプロットにおいては作者自身による加工が見られる。

この、作品のモチーフと実際の作品の差異をどのように説明づけたらよいだろうか？ここで推測しうるのは、グリゴリエフとメニショバ両者の人生と深く関わってきたドストエフスキーが『ロマン的世界』を持っていたということだ。

この『ロマン的世界』とは欲望論を研究する竹田氏によって用いられている概念である。<『ロマンの世界』を形づくるのは現実のみすぼらしさと、もっと素晴らしい世界への「憧れ」、という2つの契機である。

「いまここ」の世界よりももっと素敵の世界があるという直感によって、それははじめの芽を持つ。『ロマン的世界』は「いまここ」の現実、つまり日常の世界の否定と、「未来」および「向こう」の世界への「憧憬」を本質的に含んでいるものなのだ。

現実の世界の体験というものはたしかにひとつの「世界」の体験だとは言えるが、そこには絶えざる「挫折」と「断念」が含まれる。現実の世界で自我の拡張を生じさせるためには「他者の承認」が不可欠であるからだ。なぜなら、現実の世界では、相互承認の戦いの中でつねに自分の力が「全能ではない」ということを思い知らされるからだ。これに対してロマン的世界ではただ、「世界」が新しい様相で次々に現れ出し、その世界を自分のものにしていくという契機だけが存在する。

ロマン的世界はナルシズムに根を置く反現実の世界であり、「現実」から遊離した「夢想」の世界にはかならない。

しかしながら現実世界との間に様々な確執を持っていく中で、自分自身の固有の「夢」の世界を持つことは現実世界との間に様々な確執を体験する中での1つの避けがたい結果

²⁴Л.М.Рейнус. (1967). С.145.

²⁵Николай Бердяев. Миросозерцание Достоевского. Прага. 1923. С. 17.33.

なのである。>²⁶

そのように考えてみると、結果として「カラマーゾフの兄弟」という作品の中でドストエフスキーは、朋友であるグリゴリエフの報われない恋愛、幸福とはいえない死や、メニショバの失恋などを現実の経験として取り入れた上で、その現実を乗越える世界、夢の世界すなわちロマン的世界の中で、グルーシェニカとドミートリーという登場人物にその欲望を託した上でモークロエ村の場面に象徴されるような愛の世界を作り上げたということになる。

また、補足ながら Geoffrey C. Kabat. も評論や作家の日記などにおける Ideology 的なドストエフスキーと創作における imagination 的なドストエフスキーとのギャップに注目している。

「…『カラマーゾフの兄弟』を書いたのと同じ人物が『作家の日記』のある節を、疑うべからざる誠実さをもって、どうして書きえたのか、と問う点までこの矛盾を追及したものは、もしあったとしてもきわめてわずかである。この問いは、芸術家とプロパガンディストとのきちんとした区別を越えて一現に、それは状況が変わればとったりつけたりすることのできる仮面を暗示している一、われわれに、ドストエフスキーの人格の二つの異質な面が致命的関係にあることを示すはずである。

ドストエフスキーの二大作品群である持論とフィクションは、一般的には、私がイデオロギー的方法と想像的方法と呼んでいる二つの明瞭な思考方法によって特徴付けることができる。私がここで用いている意味でのイデオロギーは、よそよそしく、かつ疑わしいものに思われる一切のものにたいする硬直した制限と拒絶（破門と言っていいくらいの）にもとづく世界との関係を表している。創造力はより包括的で、より開放的な、そして外観的矛盾相互の、つまり自—他、外見—本質、のあいだの和解に基づくより高い状態の関係を表している。この二つの思考方法が逆にドストエフスキーのなかの基本的な心理的態度を反映しているというのが、私の仮説である。…イデオロギーとその根底にある感情は、矛盾や挫折への最初の、心理学的には原始的な反応を構成するかに見える。ドストエフスキーはいきなり統合、認容、芸術的世界観の水準に達するわけではなく、イデオロギーの衝動から自らを解放して初めてそこに達するのである。かくて、イデオロギーは想像力への障壁であると同時にそこに至る踏み台でもあることになる。」²⁷

2. 名前の意味論からの考察

「まさに、名前に、アイデンティティというものの二重性がある—自分は自分であって、それ以外のものではあり得ないと主張される自分は、他方ではどこかに所属している（ど

²⁶竹田青嗣著、『エロスの世界像』、講談社、1997年、PP92—109、「ロマン的世界」の章より要約。

²⁷Ideology and imagination. the image of society in Dostoevsky. Geoffrey C. Kabat. New York. Columbia University Press. 1978. pp. 164-165.

ここにも所属しないことが、すでに所属である。人はこの独特の所属のしかたにもまた名をつけるであろうから)、あるいは所属せざるを得ないというこの原理は、名づけ、すなわち、ことばの原理そのものから発しているように思われる。²⁸⁾

古今東西にわたり、人間の持つ名前というものは、人間の生そのものに大きな影響を及ぼしているようである。文学作品において登場人物の各人たちが持つ名前にもプロットに影響を及ぼすような作者の意図が存在しているだろうことも間違いない。ゆえに、ここでは名前の持つ意味論から、いわばミクロ的な研究をしてみた。ちなみにドストエフスキーの諸作品に関する固有名詞の研究は、АльтманМ.С. БеловС.В. Charles Passage, 江川卓氏等比較的多くの研究者のテーマともなっているところだ。

2-1. ドミートリー=デメテル

ドミートリーというロシア語の名前の起源は、ギリシャの農業女神の名前であるデメテルDemeterをさしているとするのが現在一般的である²⁹⁾。また、この農業女神はイタリアの穀物の女神であるケレースЦерераとも同一視されている³⁰⁾。このケレースと人間についての詩が、ドミートリーの告白の中で登場する(14, 98)ことから、ドストエフスキーがデメテルを意識して造形したことがうかがえる³¹⁾。古代ギリシャの大地母神デメテルは、農業、豊穰、結婚の女神でもあり、アテネ近郊のエレウシスはその信仰の中心地であった。死者を復活させる「母なる大地」の女神デメテルに捧げられた「エレウシスの秘儀」は、後にキケロも入信したらしいが、輪廻転生、生々流転の思想とむすびついており、この信仰に入って秘儀を受けた者は、死後、大地母神の内部に入り、神なる母の中から再生すると信じられた。³²⁾

2-2. グルーシェニカ=梨Груша

グルーシェニカの人名に関してはВ. В. Беляевによる研究が存在している。³³⁾そこに書かれている事項は、グルーシェニカГрушенькаの名が持つ意味—食用の果物と野菜を意味す

²⁸⁾田中克彦、「名前と人間」、岩波新書、1996、P13。

²⁹⁾ドストエフスキーの名前に関する研究については、Charls Passage. Character Names in Dostoevsky's Fiction. Ann Arbor. Michigan. 1983.の巻末にラテン文字化したロシア語名、英語名、名の含意が列挙されている。

³⁰⁾江川卓、『謎解きカラマーゾフの兄弟』、新潮選書、1991、P219。

³¹⁾ドミートリーと大地との結びつきについてはВ.Е.Ветловская. Идеал мадонны в Братьях Карамазовых. // сборник. ред. Коллегия. В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том15. стр.305-326.に詳しい。

³²⁾白石治朗著、『ロシアの神々と民間信仰』、株式会社彩流社、1997年、P184。

³³⁾В.В.Беляев. Имя грушенька в Братьях Карамазовых как антропоним. // сборник. Ред.коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том 10. С. 176-181.

る指小形の女性形の植物界の言葉である、つまりは梨Грушаのことである。梨の持つイメージ・シンボルというものは、カラマーズフの兄弟で大きな意味を持つ葱や童や、大地等のイメージ・シンボルと並んで入るのではないかということだ。イメージ・シンボル事典³⁴によると、梨は気まへのよさを象徴する。梨は土壌が貧しくとも豊かな結実をもたらすからである。また、その実が心臓形をしているところから、情愛を表す。イコンでは「情愛」の持ち物であり、キリスト教では、キリストの人類愛を表すという。少なくとも、梨はその形状からして、スメルジャコフが持つギター等と同様に女性性を連想させ、なおかつ『カラマーズフの兄弟』のエピグラフでもある「よくよくあなたがたに言うておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだならば、豊かに実を結ぶようになる。」というエピグラフなどとも呼応して、物語の中に農耕性の主題を織り上げてゆくのだ。

2-3. 農耕のメタファー（カンディード）

『カラマーズフの兄弟』において、デメテルに起源を持つドミートリーという名前に象徴されるものは、まさに小説プロットにおけるドミートリーの、退役軍人という立場から農耕回帰へと変わり行くその主題なのではなかろうか。物語最後での主人公の台詞を紹介しておこう。

「グルーシャと向こうに渡ったら、すぐにどこか、なるべく奥の、人里離れたところで、野性の熊を相手に畑仕事をして（Пахать）、働くんだ。…こっちへ帰ってからは、どこか奥深い田舎で大地を耕して、一生アメリカ人に化けとおすつもりだよ。これは絶対に変わらない。賛成してくれるかい？」（15, 185）

ここで、生涯の目標を語っているドストエフスキーの覚書を紹介しておきたい。

24 декабря 1877

Memento. На всю жизнь.

Написать русского Кандида.

Написать книгу о Иисус Христе.

Написать свой воспоминаения.

Написать поэму Сороковины. (17, 14)

「生涯にわたる覚書。

- 1、ロシアのカンディードを書くこと
- 2、イエス・キリストについての本を書くこと
- 3、自分の回想記を書くこと
- 4、叙事詩『供養祭』を書くこと」

ここで注目したいのが、ドストエフスキーの創作目標の2番目であるロシアのカンディードを執筆するということだ。ヴォルテールのカンディードについて紹介しておこう。<

³⁴山下主一郎他訳、『イメージ・シンボル事典』、大修館書店、1984、P487。

ヴォルテールのカンディードは1759年に発刊された。ライプニッツの楽天的な予定調和説を信じる哲学者パングロスは、純心な青年カンディードに、「この世ではすべてが最善である」と教える。しかしながらカンディードも彼の恋人のキュネゴンドも、そしてパングロスも、この世のありとあらゆる困難と悲慘を経験したあげく、最後にやっと平和な暮らしに至る。そして「とにかく、われわれの庭を耕さねばならない」と悟る。物語の舞台はヨーロッパ全域から南アメリカにまで及び、実に多くの事件、戦争、地震、災害などが起こるが、それを描くヴォルテールの文章は平易、簡潔、明快で、風刺のなかにも人生の知恵とほろにがさを包む名文であるという。>³⁵このカンディードの最後の台詞「いかにも、その通り、だが、庭を耕さなければいけない」³⁶という台詞と先ほど紹介したドミートリーとの台詞、そしてありとあらゆる苦悩の遍歴を経て農耕に回帰しようとするプロットには類似性が感じられる。ロシアの研究者の言説では、ドミートリーについては触れられておらず、井桁貞義氏がその連関性についてほのめかしているのみであるが³⁷、論者はあえてここでドミートリーとの連関性を強調したい。

ドストエフスキーの創作目標の1つであったロシアのカンディードの姿は、ドミートリー・カラマゾフに投影されているのではなかろうか。また、ドミートリーとグルーシェニカの物語を名前の意味論から探っていく事によって、ドストエフスキーがグルーシェニカとドミートリーの物語の中で新たな神話を作り上げたということが推測しうる。

以上のことを加味した上で、ドミートリーの物語には、グルーシェニカへの愛を通した非生産性（軍隊への勤務を象徴とする）から生産性（農耕をその象徴とする）への回帰が大きなテーマとして存在していると考えることが可能である。

そしてこの農耕のテーマそのものがカラマゾフの兄弟のエピグラフである「よくよくあなたがたに言うておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだならば、豊かに実を結ぶようになる。」という福音書のテーマそのものとも関連してくるのだ。

<農耕は人間に有機的生命が根本的に一となることを教えた。そしてこの啓示から、女性と畑との間、性行為との間の最も単純な類似性を考えつかせし、また最も進んだ知的総合、すなわちリズムミクな生命、回帰としての死、などを生み出したのである。かかる総合は、人類の発展に基本的なものであり、農耕の発見以後、はじめて可能となったものである。救済の希望の最も重要な基礎の一つは、農耕の先史時代の神秘性のなかに見出さるべきものである。すなわち大地に隠された種子のように、死者もまた新しい形の生命に復

³⁵『世界文学大事典』編集委員会編、『集英社 世界文学大事典1』、集英社、1996年、P410。

³⁶世界文学大系16、筑摩書房、昭和35年。（ドストエフスキーの蔵書には、ドイツ語版のヴォルテール全集が存在したので、そこからカンディードを読んだのではなかろうか。詳しくはЛ.П.Гроссман. Семинарий по Достоевскому. М. Петроград. Госдарственное издательство. 1922.を参照。

³⁷井桁貞義著、『ドストエフスキー言葉の生命』、群像社、2003年、P243。

帰することを希望することができる。そしてまた厭世的というよりもむしろ懐疑的でさえある生命観もまた、その起源を植物界に対する瞑想の中に発見する。なぜなら、人は野の花の如きものだからである。>³⁸

3. ドストエフスキーと資本主義

『カラマーゾフの兄弟』の舞台となった年は、L・グロスマンによると、1866年、江川卓氏によると1874年など諸説あるようだが³⁹、ロシアにおける農奴解放後の、封建主義体制から資本主義体制への移行期であったことは間違いないようである。よって本章では、ロシアにおける農奴解放と資本主義、『カラマーゾフの兄弟』における金銭の占める作用、ドストエフスキー、アポロン・グリゴリエフにおける経済的問題、そして農耕回帰をその結末とする主題や、土壌主義等と資本主義との関連性について考察してみたい。

3-1. ロシアにおける農奴解放と資本主義

ドストエフスキーや彼の作品である『カラマーゾフの兄弟』における金銭の果たす役割などを議論する前に、まず第一にロシアにおける農奴解放と資本主義の成立について概観してみよう。

<1861年の農奴解放前のロシアは耕地共同体 *община* と農奴制を基盤とした、ツァーリの専制国家であった。農奴解放の直接の契機は、クリミア戦争（1853-55年）におけるロシアの敗北だった。英仏の軍事力に対抗するには、軍事装備の基礎にある産軸産業や鉄道が必要だった。敗北によって皇帝の権威・支配体制は震撼し、各地に農民蜂起が起こった。皇帝アレクサンドル2世は、農奴制の廃止を決意し、ロシアの資本主義的工業化の途を切り開いた。ロシアは農民の国であり、人口のほとんどは農民であったが、農民経営の独立性の脆弱と生産力の低位が支配していた。他方では、西欧において鉄道、それを生み出す産軸産業が確固として成立しており、またそれに応じた企業的・金融的組織が成立し、イギリスを中心として拡大してゆく世界市場があった。農奴解放を起点とするロシア資本主義の構築の途は、上記の2条件を独自の形態で結び付けてゆく過程であり、その支柱はロシアの共同体的農民をかかえるものとして膏血＝搾取することにあつた。農奴解放によって農民は農奴主に対する人身的隷属から解放され、人格的自由を与えられた。しかし、解放にあたって、農民の土地、「分与地」*надел* は旧農奴主＝地主による土地切り取りによって縮小されたうえーロシアの穀倉＝中央黒土地帯では切取地は旧分与地の四分の一にまで達した一、高額の買い戻し金の支払いによって初めて農民のものとなった。国家は買い戻し金の75-80%の額については地主への5パーセント利子付公債の授与によって肩代わりし、農民はその額の6%づつ49年賦で国家に弁済することとされた。この

³⁸エリアーデ著、堀一郎訳、『大地・農耕・女性：比較宗教類型論』、未来社、1968年、PP273-274。

³⁹江川卓（1991年）、PP111-129。

国家への買い戻し金の支払いは農民にとって貨幣租税と同様の性格をもった。さらに、耕地共同体は国家に直属する行政機関として編成され、維持・強化された。共同体は租税・買い戻し金支払いの連帯責任を負い、農民の共同体への緊縛＝移動の拘束として作用した。勿論、広大なロシアでは地域によって、また解放前の農民の種類—私的農奴か国有地農奴または王族農奴か—によって解放の仕方も解放後の状態にもかなりの偏差があった。

また、解放の結果、農民は分与地が縮小したため旧農奴主＝地主からの借地が不可欠となり、地主は借地の代償として労役—多くの場合役畜を伴っての—、雇役отработкаを要求した。また雇役は貧窮化した農民がその債務を弁済する方法としても現象した。解放後の地主経営は基本的にこの雇役によって支えられているのであり、雇役の性格は本質的には賦役労働と変わらない。解放後の農民の一般的貧困化は、買戻金や国家租税（人頭税）の重荷に重要な原因の一つがある。これらの農民負担は、貨幣形態であったので、農民はそのための十分な前提条件なしに「小商品生産者」に転化された。>⁴⁰

農奴解放によって封建体制的な農奴の所有に関する問題は解決されたかのようにであるが、その実貨幣形態による所有体制への変化へと持続していったようであり、作品『カラマーゾフの兄弟』におけるこのような時代背景を認識することで、より深い「読み」を行うことが重要ではないか。

また、ジェフリ・C. カバトは農奴解放期の状況を以下のように指摘している。

「しかしながら、やっと解放の時がきてみると、それはほとんどの当事者たちにとって失望すべきものであった。…解放は、とどのつまり気乗りうすな、もろもろの制限にがんじがらめにされたものだった。悪くすれば—いわば、これは急進派インテリゲンチヤと小作農の見解であったが—詐欺であった。」⁴¹

3-2. 金銭が作品の外面的プロットを支配

『カラマーゾフの兄弟』の中で金銭が果たす役割については Robert.L.Belknap が指摘している。彼によると、金銭は『カラマーゾフの兄弟』においては、まちががなく“アレ”である。それは地面にたたきつけられ、フランス語の辞書や、《胸の上部》にあるお守り袋や、長靴下の中や、布団の下や、手文庫の中や、聖像画のうしろに隠され、ぼうしの房飾りにまきこまれ、あるいは、“わが天使グルーシェニカへ。来る気になったら”と書かれた封筒に入れられているだろう。フォードル・パーヴロヴィチは、このものを女性との関係を築くその力のために欲し、イワンとスネギリョフは旅行することのできるその力のために、そしてスメルジャコフは、レストランを開業することのできるその力のために欲する。金銭がスメルジャコフとフォードル・パーヴロヴィチの主たる結びつきである。給料として支払われ、スメルジャコフが返したなくしたお金がフォードルの信頼となり、そして殺人

⁴⁰藤瀬浩司著、『資本主義世界の成立』、ミネルヴァ書房、2004年、PP139-141。

⁴¹Geoffrey C. Kabat. (1978).

の動機にもなる現金。しかしこのお金とスメルジャコフの間には別の要素もある。それは、彼がスメルジャコフがそのためにフォードル・パーヴロヴィチを殺害した三千ルーブルを手放す次の場面でみられる。

「しかし、この金ほしさに殺したとしたら、なぜこれを俺によこすんだ？」深いおどろきをこめて、イワンは彼を見つめた。

「わたしにはこんなもの、全然必要ないんです」片手を振ると、スメルジャコフはふるえる声で言った。「前にはそういう考えもございましたよ。これだけの大金をつかんで、モスクワか、もっと欲を言えば外国で生活をはじめよう、そんな考えもありました。それというのは、『すべては許される』と考えたからです」(15, 67)

実際に去るとき、スメルジャコフはこの別れの言葉を続ける。

「いずれ明日な！」イワンは叫んで、帰ろうとしかけた。

「待ってください…もう一度その金を見せてください」

イワンは札束を取りだして、示した。スメルジャコフは十秒ほど見つめていた。

「さあ、もうお帰りください」片手を振って彼は言った。(15, 68)

これは実利的な、経済的な言葉ではない。イワンがスメルジャコフの罪状を証言すると主張することでこの金の購買力を無にしたあとで、スメルジャコフとこのお金との間には感情がはいつてきている。

一般的に、金銭を通じて人と人とを結びつけるこの感情的なつながりは力を買うことへの特殊な拒絶あるいは否定の上にあられ、ときには全体として実利的なつながりにとってかわる。たとえばカーチャは、自らを売るためにミーチャのところへやってくる。ミーチャはごくふつうの商業的反応、つまり彼女を買うかあるいは追い出すか、を考える。ところが、彼はその代わりに彼の残りの財産の大部分である四千五百ルーブルを彼女に渡し、という反応をみせる。彼女は崇拜という行為で応え、病的に恋におちる。彼女は、結局はもっと正常な実利的反応を示し、負債を払い、そして手を差し出すのだが、彼女にとっては、金銭上の関係が感情的なそれによって影を投じられたのだ。彼女は関係のイニシアチヴをとり、ミーチャに三千ルーブルを任せた。彼は必然的にふたつの道があると考えた、頼まれたとおりに金を送るか、あるいは、この金で自分自身を彼女に売ってしまうか。代わりに、彼はその金を横領し、彼の最初の反感を恥辱へと具体化する。それは横領した金のすべてを使い込むという過ちでますます悪化していく。

この金銭的關係から感情的な關係への変形は、ミーチャが相続した財産の歴史という側面によくわかる。フォードルとミーチャの母との間の心からの憎しみはフォードルがそのために彼女と結婚した財産にかわる。彼女の死後、フォードルは自らが彼女から相続した二万五千ルーブルの取り分をミーチャが請求するまで、ミーチャのことを忘れてしまう。この金銭上のつながりはまもなく感情に帰する。そしてその感情はフォードルが実利感覚を無視して腹いせにミーチャの価値のない略式借用書／手形を手に入れるところまでいってしまう。彼はグルーシェニカをつかってこの負債を要求させようとし、この商業的な関

係がしだいに感情的なものすなわち情欲にとってかわられる。ミーチャに対するグルーシェニカの経済的な力は、実利的な反応ではなく、感情的なものを暗示している。つまり、彼女を殴りたいという欲求がしだいに彼女を所有したいという欲望にとってかわられる。彼は、同じ実利上のつながりが感情的なものへ移行したことからスネギリョフを殴り、カーチャはスネギリョフ家へアリョーシャに二百ルーブル届けさせる。スネギリョフは告別の悲哀をもってお金のもつ購買力を数え上げ、病的な興奮の感情からそれを拒否する。その感情のちにアリョーシャへの精神的な依存にとってかわられる。

ときどき、文学的言及はお金を感情でいっぱいにする。スメルジャコフは30枚の紙幣のためにフォードルを殺し、ユダのように自ら首を吊る。ラキーチンはアリョーシャを25ルーブルでグルーシェニカに売る。これらふたつの金額は聖書の話をつなげるふたつの方法である。イワンが悪魔にコップを投げつけたことが、ルーテルのインク壘のパロディになっているように、ラキーチンは「君はキリストじゃないし、俺もユダじゃないよ」(14、325)と否定することでこの聖書的な連想を明らかにしている。』⁴²

確かに『カラマゾフの兄弟』の中では金銭が作品のプロット構成において重要な役割を果たしている。各登場人物について調べていってみよう。

まず、フォードル・カラマゾフだが、無一文から出発したが、死んだ時には現金で10万ルーブルほど貯蓄があった。この彼の持つ財産こそが事件の発端となる。

フォードルは最初の結婚で25000ルーブルの金と市内の家を巻き上げる。そして2人目の妻の死後オデッサで3～4年間を過ごし、そこでユダヤ人と知り合って商売の才覚を磨く。そして郡一帯の飲み屋街の経営者となり、金貸しも行なう。その結果として10万ルーブルほど持っている。

その後グルーシェニカのために3000ルーブル用意する。チェルマシーニャの伐採権8000ルーブルのためにイワンを派遣しようとする。

また、ミウソフについてだが、彼は農奴約1000人分の独立した領地を持っていたが、修道院と地所を接している場所の漁業権あるいは伐採権を争い、訴訟を起こす。

また、ドミートリーは自分には財産があると確信して育つ。自分の財産に関して誇大な誤った認識をしている。借金をしこたま作っていた。フォードルとの間で財産を巡って確執となり、殺人事件にまで至るのである。

軍隊時代にフォードルに権利放棄書を送りつけて、6000ルーブル調達する。

カテリーナ・イワーノブナのために5000ルーブルの無記名債権を手渡す。4500ルーブル彼女には父のために必要だった。後日260ルーブルのお釣りが返ってくる。その後カテリーナからは4500ルーブル返還される。

彼の名義の手形を持っていたグルーシェニカを殴りにいくが、意気投合してカテリーナ

⁴²Robert. L. Belknap. The structure of the Brothers Karamazov (Evanston:Northwestern University Press. 1989.). pp. 58-66.

から預かった3000ルーブルをモークロエで消費。返さなければならぬと感じる。

サムソーノフに示談に行くが上手くはいかない。ホフラコワ夫人には金鉱掘りを進められる。その後2000～3000（実際はそうではなかったようであるが）ルーブルの金でモークロエの食糧を調達する。ペルホーチンはホフラコワ夫人から調達したと思い込む。その後、700ルーブルポーランド人に遣る。モークロエでの騒ぎは以前のグルーシェニカとの馬鹿騒ぎで3000使ったと思われていたが、実は半分しか使っていないで、1500ルーブルが胸の袋にしまっており、その金で行なったものだった。

イワン、アリョーシャについてだが、将軍夫人が二人に1000ルーブルずつ与える。イワンが大学に入る頃には2000ルーブルにふえていた。ポレノフが彼らを養育し、その金額は1000ルーブルを越える。大学時代、イワンは自分の実行力で金銭を調達する。イワンはフォードルの用事でチェルマシーニャへと出かける。アリョーシャは金銭とは無縁のユロージヴィのような人生を送る。

カテリーナ・イワーノブナは、母が名門の出だが、持参金はなく、父親が原因でドミートリーから4500ルーブルの援助(?)を受ける。モスクワに出立後運命が急転し、80000ルーブルを手に入れる。4500ルーブルをドミートリーに返還する。また、スネギリョフのために200ルーブル工面し、アリョーシャに持たせる。

スメルジャコフはフォードルから給料を受け取っている。フォードルが100ルーブル札を3枚泥濘に落とした事があったが、拾って届けている。

グルーシェニカは、商人のサムソーノフから8000ルーブル分けてもらい、それをもとに商売をする。そして、モークロエでの大金をつぎ込んだドンちゃん騒ぎのすえに愛をとげるのである。

ブラウは「申し出の受け入れと受けた贈り物や行為の返礼は萌芽的交換関係の、そしておそらくは永続的友情の出発点になりやすい。個人間でさまざまな利益の交換が拡張するにつれて、しだいに彼らは相互依存的になり、相互信頼を確立し、社会的絆を強化する。」⁴³と指摘しているが、本論文4の贈与に関する研究で明らかにしているように、作品内の贈与の関係において、小説『カラマーゾフの兄弟』では贈与の行為が作品構成のプロットに強い影響を及ぼしていることはすでに述べたが、その形態としては貨幣が使用されている。ここまで、作品内において貨幣的な交換がクローズアップされているのは、上述したように農奴解放によって封建体制的な農奴の所有に関しての問題からの貨幣形態による所有体制への変化を如実に反映させているものといえる。

3-3. 作家たちの実情

作品内における貨幣の果たす役割は以上のようなものであるが、作品『カラマーゾフの

⁴³ピーター・M.ブラウ著、間場寿一[ほか]訳、『交換と権力：社会過程の弁証法社会学』新曜社、1974年、P95。

兄弟』はあくまでドストエフスキーによって作り出された言語芸術の1つであるわけであり、それだけを研究していくだけでは視野狭窄に陥りかねない。そのフィクション性については本論文1-3においてドストエフスキーの持っていた『ロマン的世界観』によって説明している。ゆえに、この章では作家ドストエフスキーとドミートリーのモデルとなったアポロン・グリゴリエフの経済状況、貨幣との関わりについても触れてみたい。

第一に、ドストエフスキーが借金に追われながら作品を作り続けたことは一連のドストエフスキーの書簡の中で明らかである。また、彼の賭博狂いは金銭的不足の大きな原因ともなり、その経験は小説『賭博者』のモチーフともなっている。

ドストエフスキーは彼をとりまく逆境—債権者の露骨さ、編集者たちに頭を下げて頼む前払い金への依存—のおかげで成功したのだ、と推測することもできるだろう。また、彼の窮乏とのしかかる外圧が芸術的失敗にたいする言いわけを彼に許したのだという皮肉な見方もできるかもしれない。しかしながら、手紙類から見て確かなことは、ドストエフスキーにとっては、借金と締め切りの際限のないイタチごっこが、彼を繰り返し「行き場のない」、そして「自分を救うために」書かなければいけない状況に追いやり、彼の極端な孤立とマーケットへの依存が激しく彼の自尊心を揺さぶり、当時のもっとも著名な同時代人たち—彼らのことを、彼は「地主の文学と言っている」—から彼を区別する特徴となったのだということである。⁴⁴

彼の作品の「出来栄え」が、たんに締め切りに間に合うように書かなければならないという圧迫に影響されているだけでなく、書く事についての考えや内容も、金銭的な不如意、市場への依存、心もとない険悪な状況の束縛に影響されている。⁴⁵

そして、次にアポロン・グリゴリエフの経済的な状況であるが、彼に至っては当時ロシアに存在した債務監獄への投獄を余儀なくされている。エゴロフによるアポロン＝グリゴリエフ自伝からの引用を紹介しておこう。

くそして我が文学者の解放された生活も、彼の監獄への懲役によって引き裂かれてしまった。しかしながら、それほど恐ろしいものではなく—債務監獄であった。グリゴリエフは向こう見ずな生活を続けていた。彼はどうやら、十分定期的に雑誌の編集局から稿料を受け取っていた。文学基金に（文学基金は貧乏している文学者と学者のためのものだった）彼は800ルーブル請求し、1860年の3月に300ルーブルを受け取った。儉約家で、質素な人間にとっては、そのお金で貧乏しない生活が送れたことだろう。しかしながらグリゴリエフに儉約を期待することが出来なかった。Катковの金を使い込み、ペテルブルグに帰ってから、彼は高利貸しのК.А.Лаздовскийからもう400ルーブルを借り、当然のことながら利息も、借金そのものも返さなかった。Лаздовскийは彼を1861年の1月に、《Яма》と呼ばれている監獄に入れた。

⁴⁴Geoffrey C. Kabat. (1978). p. 104.

⁴⁵Ibid. p. 107.

《Яма》とはつまり債務監獄のことであり、それは非公開の施設で、そこには、債権者が警察の力を借りて、だらしのない債務者を拘禁することが出来たが、しかし債権者はその犯罪人のために、ほんの少しのお金である3ルーブル72コペイカを自分のお金で月に払わなければならなかった。つまりは一日で12コペイカである！明らかに、このような借金は債権者にとっては甘いものではなかったが、しかしもしも債権者が耐え切るか、あるいは、彼には全く支払う望みがないのだとするならば、彼が債権者を何らかの形で兵糧攻めにしたいと夢見るしかない—債権者が、《食い扶持の》お金を払うのを飽きるまで、囚人が自由を得られることはないのだ。監獄に入ることの出来る最大の時間は、商人にとっては3年間であり、他の人々は—5年である。タバコを吸ったり、酒を飲んだり、カルタ賭博をすることは禁じられていたが、しかし実際はそんなことを守るものは一人としていなかった。>⁴⁶

アポロン＝グリゴリエフにおいては債務監獄という極限的な状況であり、両者にとって資産運営能力の致命的な欠如が特殊ではあるが、彼らの状況はともに、土地から切り離され、資本主義的動乱期の貨幣経済を回轉的に生きていかなければならなかったインテリゲンチヤの状況を反映しているものといえる。次章でドストエフスキー、アポロン＝グリゴリエフらが論陣を張った土壌主義について論じていくわけだが、土壌主義とは、まさにその動乱の時期を生きていくためのイデオロギーを形成しようとする彼らの試みであったのだろう。

4. アポロン＝グリゴリエフ及び土壌主義 Почвенничество 研究

以上のように前章まで『カラマーゾフの兄弟』に一貫する農耕性の主題について述べてきたわけだが、この農耕性の起源となったものは、1つにロシアに太古から伝わるロシア農民の大地信仰であり、⁴⁷『罪と罰』においてソーニャによって告解を告げられ、大地にひざまづくラスコーリニコフの姿の中で具現化されているが、その他にもドミートリー＝カラマーゾフのモデルとして前述したアポロン＝グリゴリエフらと雑誌『プレーミヤ』で土壌主義というイデオロギーをここで無視するわけにはいかない。というのも、ドストエフスキーは工兵学校の出身で、当時としては高学歴だったが、ペトラシェフスキー事件によってシベリア流刑を余儀なくされていた。アポロン＝グリゴリエフはドストエフスキーに当時最先端の西欧事情を伝達しており、その交流もまたドストエフスキーの創作に多大なる影響を与えているということも間違いない。

その中で研究を進めていくと、この『土壌主義』というイデオロギーの根幹となっていたのは、大地信仰も勿論のことではあるが、シェリングらのドイツ神秘主義思想、エドモンド＝バークといった保守主義思想でもあることが明らかになってきた。この土壌主義の

⁴⁶Б.Ф. Егоров. (2000). С.178—180.

⁴⁷詳しくは、白石治朗(1997)、を参照のこと。

研究に関しては、日本では望月哲男教授ならびに米国では Wayne Dowler 等によって優れた研究がなされており、本論文において新しい視点・論点を提供できるわけではないが、後述するドストエフスキーにおけるシェリング概念などとも関連性があり、なおかつロシアが世界において思想的に孤立していたのかどうかという疑問についてもある種の解答が出せることがわかってきた。また単に文学的想像力だけにとどまらないドストエフスキーのイデオロギーの堅固さが、ドストエフスキーの諸作品に普遍性を与えている。ゆえに、知の系譜学的にならざるをえないが、ここで過去の土壌主義研究に関する整理付けという意味で本論を述べたい。

4-1. ロシアにおけるインテリゲンチヤ

ここでまず第一にロシアの思想形成の核となったインテリゲンチヤについて述べることにしよう。Wayne Dowlerによってロシアにおけるインテリゲンチヤの誕生について詳細に述べられている。⁴⁸インテリゲンチヤとは、近代化における、ロシアのゆっくりとした落ち着かない進歩の創造物だった。文化的近代化の衝撃は、教養ある少数派を旧式の経済的、政治的、そして社会的な秩序から押し出し、彼らに狭い階級的なものから逃避することを可能にした。彼らには特定の階級というものは存在しなかった。彼らには共通する教養はあったが、階級的なものとは切り離されていた。

そして、彼らは19世紀初頭のロシアに存在した不安要素を感じ取り、その回答を出そうと身を捧げたのだった。

彼らの階級的な出自は様々であり、多様性を持っていたが、疎外は唯一のロシアのインテリゲンチヤに共通した特徴だった。もう一つは西ヨーロッパに形成されつつあったリベラルな資本家達に対する嫌悪感だった。貿易に対するエリート的な侮蔑感から免れることのできなかつた知識人として、彼らは西洋の中流階級の商業的精神や資本的モラルや、その思考や習慣の推測的な卑属性に対抗していたのである。彼らは真のコミュニティーの可能性を不可能にする自由契約的国家の権威主義と没個性を拒絶していた。

インテリゲンチヤのメンバーは一つの追加的な性格を持っていた。それはロマン主義時代のユートピア精神に知的な起源を持つものだった。ロマン主義は、想像的社会調和や、単純性や、前工業化社会の精神的結合への回帰を熱望することにその起源を持っていた。ユートピア的社会主義は根本的には保守主義的な熱望という性質を帯びていた。ユートピア社会主義者たちは過去の農業的共産主義を理想化し、その中の何人かは自治的なギルド社会への回帰を夢見ていた。John Weissは近年、こう結論付けている。「ユートピア的社会主義と言われたもののうちのほとんどはその見解上においては本質的に保守的といわれなければならない。」⁴⁹

⁴⁸Wayne Dowler. *Dostoevsky, Grigorev, and native soil conservatism*. (Toronto Buffalo. University of Toronto Press. 1982.)

⁴⁹John Weiss. *Conservatism in Europe. 1770 - 1945. Traditionalism. Reaction and*

このようなインテリゲンチヤの同一性にも拘わらず、彼らははっきりと西欧派とスラブ主義の二派に分かれた。インテリゲンチヤの個人間の出身階級というものは、彼らの選ぶ道のりに余り影響をおよぼさなかった。似通った家族や家庭環境というものは過激派にも、保守派にも見られたのだ。社会学的な決定要因よりも、左派と右派の道のりの違いを決めたのはもっと個人的な要因であり、彼らの人生経験から生じた、性格であり、道徳的な選択であって、それぞれの仲間との個人的な接触だった。その中で大きな役割を果たしたのは著者によるとベリンスキーやバクーニンといった数少ない強烈な個性だったという。和解は過激派の思想には二次的なものとなり、保守主義的インテリゲンチヤにとっては中心的なものとなったのである。また、土壌主義においては、和解の哲学は完全なる表現を達成したという。しかしながら「若き編集者達」も後の土壌主義者達も、彼らは西欧主義者達とスラブ主義者⁵⁰達の論争を超えて進んでいると信じていたのだ。1860年代早期に土壌主義者達はニヒリスト達の哲学的な批評を引き受けていただけではなく、若きロシアに対してチェルヌィシェフスキーやピサーレフの過激主義に対する積極的な選択性を与えようとしたのだ。批評的には彼らはロシアの過激派であり、土壌主義者達は他の保守主義と距離を置いていた。彼らは初期のスラブ主義を認め、何らかの尊敬の念を抱いて彼らを模倣していたが、方法において異なってもいた。彼らはまた、1860年代に右派のカトコフやアクサーコフと論争を行ったりもしたという。>

4-2. ロシアにおける保守主義思想

次に、ロシアにおける保守主義思想について論じてみたいと思うが、その理由としては、第一にロシアにおいてはソ連期の社会主義ないしは共産主義思想のみがピックアップされ、イデオロギー的なある種のかたよりがあるのではないかという先入観が論者自身の中にも存在したのであるが、しかしながら西欧思想の伝統的な流れが間違いなくロシアにも受け継がれていたということが理解できたからである。この章では、土壌主義の前提となったロシアにおける保守主義あるいは伝統主義と、西欧の先進的思想潮流との対話と拮抗の歴史を明らかにすることにしよう。

Wayne Dowlerによって土壌主義発生の前提としての19世紀ロシアにおける保守主義⁵¹の発生について主に述べられているが、その生成についてはヨーロッパの保守主義が第一にあげられている。<近代的ヨーロッパの保守主義の一家にとっては遅参者ではあったが、ロシアの保守主義も、経済的、社会的、そして文化的な近代化の到来によって伝統的な価

counter-Revolution(London 1977). 60.

⁵⁰西欧主義とスラブ主義に関する思想・論争については勝田吉太郎著、近代ロシア政治思想史、創文社、昭和36年に詳しい。

⁵¹保守主義と一口で言っても、その概念付けだけでも多大なる労苦を要するであろう。ヨーロッパ及びアメリカにおける保守主義については日本で既に先行研究が行われている。例えば、山崎時彦著、『保守主義の生成と発展—政治思想史』、昭和堂、1984年を参照されたい。

値観に訪れた恐怖と直面しなければならなかった。

ここで哲学と保守主義が対比的に論じられているわけだが、哲学においては18世紀には特定の統治者達が哲学の中に新しい協力者を見つけたという。哲学の啓蒙的思考の中心となったのは楽観主義であり、それはルネッサンスまでに建設され、それは世界の明瞭さと、人間的自然の本質的長所に関わるものだった。⁵²近代期の近代の過激派と自由派両方への啓蒙運動の遺産は、人間の完全性への信念と、理性的な社会秩序の創造による人間社会の新生にとってのたくさんの人間的希望と理性だった。

理性主義と共にやってきたのが功利説だった。哲学者のほとんどが、人間の主な動機が彼自身の安全と快適さだということに同意した。この関連性こそが、社会契約の基盤の上の政治的社会の裏に横たわっているものなのである。社会契約を通して、個人的幸福を、市民的な、そして世界的な人権の枠内で、個人間の競争における関係性の政治的規制によって保証しなければならないのだ。国家はもはや、神意の独立的創造物としても、特定の歴史的経験の、独特な生産物としても捉えられているというわけではなく、原則的に、市民が最も自由に自らの経済的なそして社会的な関心を発達させるために人間によって作られた道具として捕らえられた。そのような国家においては、行政区分的な特別性や伝統的な社会的特徴は、平等市民のより同次元で開かれた社会や、後になって過激派が考えたように、ほぼ全体的な社会レベルにまで道を譲ることが期待されたのだ。

保守主義的の施行者たちは、すばやく人間や世界の啓蒙運動的な視点の裏の意味をすばやく把握し、フランス革命の最悪の行き過ぎをそこに見出したのだった。過激派と自由派に効果的に立ち向かうために、保守主義者たちは、世界の働きは哲学者達が思ったほどに人間的理性に即したのではなく、人間の理性と希望は、社会を成功裏に再び秩序付け、人間社会を発生させるためには不十分であるということ、ただ披露しなければならなかった。保守主義者たちは人間性の先天的善性に対していかなる楽観主義をも持ち合わせてはいなかった。悪は単なる非理性的な環境の一時的な創作物ではなく、人間的な状態の必然的な側面なのだと彼らは主張した。

ここで保守主義の最初の知的リーダーとしてエドモンド＝バークがあげられている。マンハイムは、バークが、フランス革命に関する政治的・思想的潮流を転換する上で、主導的役割を果たしたことをみとめて、次のように述べている。「バークの重要性は、かれがフランス革命を攻撃した最初の有力な著述家であった、という事実である。かれは、近代の反革命的保守主義の創始者であり、後に保守主義側からフランス革命を批判したすべての人々は、ともかく彼から影響を受けた、バークこそ、他の誰よりも、反革命陣営に観念とスローガンを供給した。」⁵³

一方ロシアの保守主義の背景は高度に耐久力を持ったロシアの専制主義だった。それに対してピョートル一世は過去の、死のような状態を掃討しようとする彼の努力⁵⁴において、

⁵²O'Sullivan, Conservatism, pp. 10-11.

⁵³Karl Mannheim, Conservative Thought op.cit., p. 102.

⁵⁴ピョートルによって行われた一連の改革を指す。詳しくは『世界歴史体系 ロシア史2—18～19世紀—』、山川出版社、1994年等を参照。

西洋化されたエリートを社会の上部構造の中で創造した。

そのような中で18世紀の最初という早くからそのような緊張が「ロシアと西洋」というメタファーにおいて表現されたのである。それはモスクワ公国とピョートルのロシアとの間の中断との間に存在したものであり、教育を受けたものと受けていないものとの文化的な断絶の間に存在したものであり、より伝統的なポリシーとより西洋化された主張との間に起こったものだった。

伝統主義とヨーロッパ主義の間の緊張の、革新的で効果的な決断は19世紀の始めに小説家と歴史家によって提案されたものであり、貴族的保守主義の最も雄弁な弁護者はカラムジンだった。彼によって提案されたものは他の民族性の知識を吸収することが可能なロシアの自然とそれらを純粋な民族的コンテクストの中で使用するというもので、日本で言うところの『和魂洋才』のようなものだった。

しかしながら1812年のナポレオンに対する勝利はロシアの民族的プライドを増加させた。この勝利に続くその20年間というものは後の保守主義のほとんどがロシアの意識に登場した頃だった。その保守主義的思想の主役となった人物群としてあげられているのがロシアのロマン主義者達であるが、彼らは歴史を意味づけるために、それも主にロシアの歴史を意味づけるためにドイツの哲学に回帰したのだった。本書ではその例としてビゼムスキー、チャダーエフ、オドエフスキー、プーシキン等が登場している。中でも、例えばビゼムスキーは1819年に、ロシアの言葉を新しい単語であるナロードナスチという言葉で表した。この言葉の中で彼はロシアの民族的オリジナリティーの特徴を包含しようと望んだのだ。ナロードナスチは19世紀ロシアにおける全ての社会的、そして政治的な思考における決定的な要素であったが、しかしながら保守主義における心臓部分でもあった。

1840年までに西洋と東洋の理念の間の緊張は知識人の二つのグループに分けられた。スラブ主義と西欧主義である。しかしながらこれらの議論はロシアと西洋、保守主義と進歩主義の議論でもあったのだ。ロシアも西洋も、2つの陣営に分けて考えられていることから分かるように、ほとんど類似性を持たないものだった。西洋は進歩的な徳を持ち運び、ロシアにとって理性的な解決をほのめかしたのだった；ロシアは保守的な美德を体現化し、伝統主義的な未来の前兆となったのである。西洋とは、ロシアが持っていない、獲得すべき何かであったのだ；ロシアは一方、ロシア人が今まで持っていたが、喪失の危機に立っている何かだったのだ。>

ここで、スラブ派と西欧派について概観しておきたい。

まず、スラブ派はロシアの思想潮流。<狭義では1830年代末から60年代初頭にかけて展開された伝統回帰思想。40～50年代に欧化主義の立場をとる西欧派とロシアの歴史発展のあり方をめぐって論争した。ピョートル一世の改革以前のロシアを理想化しそれへの復古を主張すると共に、ロシア正教と教会を中心とした精神的共同体（ソボルノスチ）と農村共同体を重視した。ロシア農民を共同体精神とキリスト教精神の担い手とし

て理想化し、共同体を愛と自由と調和の具現として評価する一方、西欧の基盤とみなされるローマ法や私有財産、個人主義、合理主義、強権を批判した。代表的な思想家はイワン・キレーエフスキー、ホミャコフ、コンスタンチン・アクサーコフ、イワン・アクサーコフ、サマーリン、コーシェレフたちである。1839年のホミャコフによる『古きものと新しきものについて』の報告が最初の思想発表であるとされている。1840年代には雑誌「モスクワ人」（1841-56）、および「モスクワ論集」（1846-47, 52）誌上で西欧派批判、特にグラノフスキーの歴史観やベリンスキーの文学・哲学観に対して論争し、農奴解放期には「ロシア談話」（1856-60）誌上で自派の共同体擁護を中心に農奴解放論を展開した。コンスタンチン・アクサーコフは西欧的近代化の具現としての国家権力を否定しバクーニンの無政府主義に影響を与えた。1860年代以降さまざまな変種を生み、ドストエフスキーの土壌主義や、ロシアを中心としたスラブ民族の結合を志向するパンスラヴ主義に影響を与え、ナロードニキ運動の農民中心の革命思想、さらには1960～70年代の農村派文学に影響が及ぶ。>⁵⁵

西欧派についても触れておこう。西欧派—ロシアの思想潮流。＜狭義では1840年代にスラブ派と論争し、農奴制廃止を説き、ロシアの西欧化を志向した一群の思想家を指す。代表的な思想家・学者としてチャダーエフ、グラノフスキー、コンスタンチン・カヴェーリン、チチャーリン、歴史家のセルゲイ・ソロヴィヨフ、ベリンスキー、ゲルツェンらがあげられる。しかし西欧派の思想はサロンや私的な会合で語られた断片的なものが回想によって記録されていることが多く、体系だてて論じた文献が乏しいために、個々の人物に即して後世の史家が再構築せねばならなかった。西欧派の特徴としてはピョートル一世の改革への肯定的評価とヘーゲル哲学の信奉である。チャダーエフがロシアをローマ世界から切り離された歴史の孤児として『哲学書簡』で主張したことを契機にスラブ派と西欧派の論争が開始され、双方の思想が形成されていった。ピョートル一世の近代化政策によりロシアは西欧の歴史発展に参加しはじめたとして、西欧派はピョートル改革を評価した。ベリンスキーはヘーゲル哲学の弁証法的発展を信奉し、あるがままのロシアを直接性の段階として批判し、対自の段階（反省・否定の契機）を最高段階への必然的段階として重視した。西欧のたどった歴史発展の道をロシアもたどり、人類共通の歴史に参加する必要性を主張した。文学論争において西欧派は余計者型主人公を人格の＜反省＞の段階にあるとして、その自我の分裂を肯定的に評価した。西欧派は西欧を人類普遍の発達目標としロシアをその一部として見る姿勢が特徴である。1980年代後半の外交面で提唱された＜欧州共通の家＞という構想は、西欧の歴史にロシアの発展方向を合致させるという点において西欧派の思想的伝統である。>⁵⁶

ところで40年代の終わりにはスラブ主義者と西欧主義者の議論は多かれ少なかれ袋小路に行き着いてしまった。しかしながら両陣営の主な思想や、両陣営のメタファーを同調

⁵⁵『集英社世界文学大事典5』、集英社、1997、P451。

⁵⁶集英社世界文学大事典5、集英社、1997、P454。

させることの可能性も現われた。言うなれば、つまりはこのようにして土壌主義の生まれる土壌が育っていったのだった。

4-3. グリゴリエフとドストエフスキーの交流について

グリゴリエフとドストエフスキーの交流、対話と対立については『グリゴリエフとドストエフスキー—土地主義の土壌』に詳しい。本論文は、グリゴリエフとドストエフスキー両者の影響関係について焦点が当てられた論文である。この論文は1・文学的共鳴性、2・グリゴリエフと「ブレーミャ」、3・有機的批評と土地主義、4・対立の意味で構成されている。

<1・文学的共鳴性ではグリゴリエフとドストエフスキーとの共通点にテーマが絞られている。「ブレーミャ」編集部における両者の関係は、思想的、感情的対立を含んだ複雑なものだったようだった。しかし「カラマーゾフの兄弟」の主人公ドミートリー＝カラマーゾフがグリゴリエフをモデルの1人としていること等から、両者には文学的、精神的な共鳴性が存在するようだ。批評家グリゴリエフは当初「貧しき人々」のセンチメンタリズムや「分身」「プロハルチン氏」等の作品をゴゴリ文学の悪しき歪曲として糾弾した。⁵⁷しかしながら「死の家の記録」、「地下生活者の手記」の思想には、彼は共感を示している。一方でドストエフスキーもグリゴリエフのジャーナリストの質には批判的だったが、詩人・批評家としての才能、思想への誠実さ、文学的教養の豊かさへは賛辞を惜しまなかった。両者の親和性としては、文芸の民族性を重視する土地主義の根本姿勢、芸術及び思想を一個の生命を持つ有機体と見る点、理性的分析より芸術的直感を認識の本源とする態度、芸術の自由と社会的責任を共に重視する考え方や、創作及び批評におけるあらゆる先入的理論を廃する傾向等が挙げられている。また、一年ちがいで生まれた両者の育った文学的環境も共通しているようだ。

2・グリゴリエフと「ブレーミャ」ではグリゴリエフの生涯、彼の送った《文学的・精神的遍歴》を一通り眺めることが出来る。文学者としての彼の生涯は3つの時期に分かれる。第一期はモスクワ大学法学部から同校の助手を経て、ペテルブルグへ出奔し、作家となった時期（1838-46）であり、様々な思想を受け入れながら、自らの恋愛体験を土台とした詩や自伝性の強い小説・戯曲を出版する。第二期は雑誌「モスクヴィチャン」の指導的編集員として活躍した時期で、作家にとっても実り多い時期だった。第三期である彼の晩年は、私生活的にも文学的にも最も苦しい行き詰まりの時期だった。

「ブレーミャ」の編集部では彼は土地主義の論客として同誌の右派を形成し、第二号（61年2月）からストラホフ、ドストエフスキーと同誌の批評欄を三分する勢いで論文を掲載し始める。同誌五号まで彼は精力的な活動ぶりを示すが、五月には編集部とのスラブ派評価をめぐる対立が一因となって、遠くオレンブルグの地へ《自発的流刑》に身を処し

⁵⁷Собрание сочинений Ап. Григорьева в 14 томах. под ред. В.Ф.Саводника М. 1915. т.8. С. 10.26-27. т.9. С. 17,37 и т.д.

てしまう。翌62年7月、彼は再び「ブレーミャ」、「エポーハ」に加わるが、彼の地位は既に指導的批評家というよりも寄稿者のそれだった。64年9月、数度目の債務監獄入りをしてきた彼は、出所後4日にして卒中で亡くなった。ドストエフスキーはアヴェルキエフの追悼文に付した註の中で、グリゴリエフをドブロリュボフと比しつつ、前者は後者よりもはるかに豊かな文学的才能を有していたが、後者が視野の狭さゆえに持っていた批評の明快さの魅力が前者に欠けていたと指摘している⁵⁸。また、グリゴリエフの文学者としての純粋性を認めつつ、しかも彼はどんな編集部とも折り合えなかったろうというのがその結論である⁵⁹。

ドストエフスキーとグリゴリエフ両者の共感と対立は、思想的次元でのみ捉えられるものではない。その大きな理由の一つとして60年台初頭のグリゴリエフが実生活においても文学においても行詰まりの状態にあったことが挙げられる。50年代末、彼は妻子を持ちつつ教師の娘Л. Я. ヴィザルドへの一方的失恋のはての、家庭教師としての西欧旅行(57-58)から帰国したばかりだった。彼は更にそこで淪落の女М. Ф. ドュブロフスカヤと出会い、彼女の救済を試みる。当時既にジャーナリズムにおいて彼の名声も悪名も定着し、短期間で編集部との決裂を起こしていた。経済的貧困の中で彼は借財を重ね、飲酒癖は募った。61年1月には最初の債務監獄入りをしている。彼のオレンブルグ行きも単なる文学的逃避行ではなく、半ばは債務を逃れデュブロフスカヤとの新生を計ろうとする絶望的な試みを含んでいたのだ。

3・有機的批評と土地主義ではグリゴリエフの有機的批評と土地主義の性格とが記されているが、有機的批評については前述の『有機的批評の諸相—アポロン・グリゴリエフの文学観—』<http://hdl.handle.net/2115/5184>について詳しく述べられているので割愛することとして、土地主義という思想がいかに述べられているかということについて紹介しよう。グリゴリエフの批評原理、とくにその民族主義的側面を、一方で文学作品のテーマ論に応用し、他方でロシア文学史の時間軸に沿って作家＝知識人の精神的自己確認の問題に拡大してゆくと、《土地主義》に通ずる思想があらわれる。失恋のはてに生まれ育ったモスクワを捨て、都市の売文家となった彼は、いわば《土地》を失ったロシア知識人の典型だった。その《夢想的》青年時代において、彼は様々な思想を文学的に模倣し、また戯画化しつつ、自らと社会との関係論を模索していた。自らと社会との関係論を、芸術家と社会との一般的関係論に移しかえたとき、芸術は《土地》に根ざした有機体であらねばならないという彼の有機的批評の理念が生まれたのだと考えられるのであり、更にその理念を、ロシア知識階級全体の運命のうえに映したとき、彼の《土地主義》が生まれたのだ。したがって、土地といい民族性というも、それは彼の手にある理念ではないし、まして政治的プロパガンダの理念ではなかった。それは精神的放浪者、最後のロマンチストたる彼自身が、宗教的情念をもって芸術の内にも求めた理念だった。彼の土地主義は理論では

⁵⁸Достоевский. ПСС. Т.20, С. 230.

⁵⁹Достоевский. ПСС. Т.20. С. 133-136.

なく、《生とナロードに対する信仰》⁶⁰だった。

4・対立の意味ではグリゴリエフとドストエフスキーの対立について、雑誌の方向性と《ナロード》観の質的差という2点によって論じている。

まず第一の雑誌の方向性についてだが、スラブ派への親近性を十分意識していながらも、だからこそ特に文学観、文化観において、スラブ派と一線を画す必要性を感じていたという点で両者は共通している。しかしながら、グリゴリエフが「ソブレメンニク」を論敵にしながら「ブレーミヤ」の思想的立場を具体的に示そうとしていたことに対して、ドストエフスキーは保守リベラリストのカトコフらを論敵としつつ雑誌の党派性について明白な言質を与えないことで柔軟な政治的地位を確保しようとしていた。後のドストエフスキーが雑誌編集への認識の差に帰そうとした両者の穏健派と過激派の食い違いにこそ、両者の対立の真のモメントがあるように思われるのだ。

一方彼らの《ナロード》観の質的差についてだが、《ナロードの根源》との和解の必要性を問うという点において、ドストエフスキーはグリゴリエフの思想を十全に反映しているといえる。しかしながら両者の差は、グリゴリエフの思想が精神論に結びついたのである。ドストエフスキーにおいてはそれが、現実ロシア改革のプログラムと重なって現われたということだ。彼はまず知識階級と民衆との合流というテーゼを、単に精神論的次元にではなく、《我が国全体にわたり、平和的かつ万民一致のうちに成就されんとしている偉大な転換》として、農奴解放を中心とした一連の制度改革のプログラムの根本に位置づける。続いてピョートル改革以降の、両回想の不幸な乖離の意味についての考察が置かれ、さらに、今やロシアの西欧化への道は歩み尽され、その成果を踏まえつつ、国民的精神に根ざす新たな民族文化を創造すべしという主張が続く。ロシアは全人類的使命をもつ。そしてその成就のためにはまず全国民の一体化が急務であり、その第一歩として知識階級による教育の普及がなされねばならぬ。(18、35-38) —こうした論議が「ブレーミヤ」の土地主義の原型だった。

このとき、グリゴリエフは民衆という他者を論じようとしたのではなかった。彼の立場はあくまで有機的批評を中心とした、文学的な捉え方をしたものであり、政治的意味には触れようとしなかった。

一方でドストエフスキーにとって民衆は、未知なる他者として現われた。それには、彼の流刑体験が大きく影響した。>このような両者の他者認識の差は、ドストエフスキーがグリゴリエフを《最も自己分裂の少ない、自己反省癖の少ないハムレットの1人だった》(20、136)と回想している中において比喩的に暗示されている。

4-4. 土壌主義の概念の起源について

土壌主義の概念の起源についてはA.П.Осроват⁶¹に詳しい。<この論文においては、土壌

⁶⁰А.П.Григорьев. Воспоминания. под ред.Иванова. разумника. М.-Л. 1930. С. 356.

⁶¹А.П.Осроват. К ИЗУЧЕНИЮ ПОЧВНИЧЕСТВА // сборник. Ред.коллегия:В.Г.

主義の概念の起源を1840年代のスラブ主義と西欧主義のアンチノミーに第一に求めている。このような中で40年代におけるドストエフスキーとグリゴリエフの共通性は反ドグマ性であり、閉鎖的な思想体系だとしてスラブ主義と西欧主義の両者を否定した。スラブ主義と西欧主義の論争において、志向性の選択（民族主義的かあるいはヨーロッパ的か）は多くの点において対立者の哲学的仮定によっていた：前者は理念的なものであり、後者は唯物論的なものだった。しかしながら土壌主義者たちはスラブ主義と西欧主義の対立を無視した。

60年台最初にドストエフスキーとグリゴリエフを結びつけた中間駅は土壌であり、その課題はドストエフスキーによって以下のように表現されている：「完全に道徳的に民衆と結合する必要がある、出来るだけしっかりと民衆と合流して道徳的に彼らと1つの集合体になるべきなのだ。」また、この発現に関してグリゴリエフも語っている：「我々は、スラブ主義や西欧主義のような学者仲間なのではない：我々は民衆なのだ。⁶²」>

この論文の中では、『グリゴリエフとドストエフスキー—土地主義の土壌』と同様に、土壌主義の破綻を主に、ドストエフスキーと、雑誌からの逸脱を幾度となく行っていたグリゴリエフとの対立に求めている。

4-5. 土壌主義の現象の本質

土壌主義の現象の本質についてはЗАМЕТКИ О ПОЧВЕННИЧЕСТВЕ⁶³で分析がなされている。この論文においては、それまであまり明確に定義づけられてこなかった土壌主義という現象の本質について、明らかにするということを主な目的として行っている。<その中において、まず第一における著者の土壌主義の概念というものは19世紀の50年代終わりや60年代において、「時代」や「世紀」の出版中において提言されたものをさすものであると定義づけられる。

しかしながら、大きな問題は土壌主義そのものに関する言説がとても少ないということであり、そのことは1864年4月13日宛てのドストエフスキーの兄に対する手紙の中で形成されている。「我々の進路というものは勿論聴衆にとっては疑いないものであるが、しかしながら進路を形作っている論文というものは少ない。」

さらに、この土壌主義というイデオロギー自体が、その問題、あるいは思想の最終決定を否定していたという事実も見逃せない。ドストエフスキーが土壌主義の中に見出していたと記述されているのは「見たところロシアに始まりかけていて、スラブ主義や西欧主義の党を追放するかあるいはそれに優越するはずであるまったく新しい生活の、特別の方向性である。その思想自身の曖昧さというものは彼を驚かせはしなかった。なぜならば彼は

Базанов (гл. ред.) и др. Достоевский Материалы и исследования. том3. Ленинград. Изд-во Наука. 1974. С. 144-150.

⁶²Б.Ф.Аполлон Григорьев. критик. Статья 1. С.198.

⁶³А.П.Осроват. (1974). С. 168-173.

その思想の発達を強く望んでいたからである。」(強調部分、作者)⁶⁴ 土壌主義とは、そのイデアそのものよりも、未来への発展性に対する希望や未来への予見の点に比重を置いていたようだ。

また、この土壌主義がドストエフスキー1人によるものではないことを強調しており、アポロン＝グリゴリエフやN. ストラーホフなどの果たした役割についても重点を置いている。

ドストエフスキーは「ロシア文学に関する一連の論文」の「前書き」の中でドストエフスキーは「文明が己の完結した過程を行ったように」、文明の担い手達は、「母なる大地」に帰らなければならない(18, 49)としている。この思想は本質的には社会一歴史的な構想における土壌主義の主要な唯一の公理である。しかしながらこの公理をオリジナルなものともみならずは出来ないという。ロシア知識人階級の《土壌》からの乖離は1847年にK. C. Аксаковがその存在を確かめている⁶⁵; その5年後に《土壌》という用語を同様の意味でE. H. Эдельсонが、論文《美的批評の現代の概念と状況に関する数言》の中で使用している⁶⁶。土壌主義者たちは自己の優先権を主張しはしなかった。

И. С. Аксаковが1863年6月6日付けのСтрахов宛ての手紙において、土壌主義の宣言には民衆と社会の相互関係の問題に対する新しい観点は含まれていないと表明したことは間違いではない。⁶⁷

「一連の文学作品の論文について」の「前書き」の中でドストエフスキーはこう記述している。「1つだけ絆が、1つの結びつき、1つの土壌だけがあり、そこではすべてが結合し、和解するのです。一それは普遍的な精神的和解なのです…」(18, 50) ドストエフスキーはそのロシアのユニークさを承知していて、それは「普遍的な精神的和解」という形をとったのだ。「一彼は前書きの中で結論付けている一われわれはまさにプーシキンにこそ、われわれの全思想の裏づけを見るのである。ロシアの発展過程における彼の意義はまことに重要で深遠である。すべてのロシア人にとって彼は、ロシア精神とはそもそもどんなものであるか、ロシア精神のあらゆる力はどこへ向けられているか、そしてロシア人の理想とははたしていかなるものであるかを、芸術的に完璧な形でまざまざと示してくれる、生きた指標にほかならない。…われわれはロシアの理想は一完全をめざし、すべての人の融和と全人類の結合であると悟ったのであった。プーシキンが出現したということによって、われわれの未来の活動すらも明らかにされているのだ。」(18, 69)

A. П. Осроват の見解によると、これらの文章は土壌主義の説明に対する鍵を与えている。上述された文章から明らかのように、土壌主義はスラブ主義や西欧主義とは異なる方向性

⁶⁴Биография. письма и заметки из записной книжки Ф.М.Достоевского. СПб. 1883. С. 199.

⁶⁵Имрек Аксаков.К.С. Три критические статьи. – В кн. Московский ученый и литературный сборник на 1847год. М. 1847. отд. Критики. С. 41.

⁶⁶См. Москвитянин. 1852. № 6. отд. III. С. 52.

⁶⁷См. Биография. письма и заметки из записной книжки. Л. 1934. С. 332.

を自覚していて、スラブ主義や西欧主義とのあまりに厳しい関係性の中で、土壌主義は見られてきた；土壌主義は結果的にその存在を流動性の中で送ることとなった（50年代終わりから60年代にかけて伝統的なしきたりの破壊というものが大変鋭く感じられた）。そして思想によって国家の動きを決定しようという試みが行われ、土壌主義者たちはスラブ主義者と西欧主義者—《理論家》と《教条主義者》の決して補強されない野心を、無意味ないらだたしいものにとらえた。ドストエフスキーによって引用された言説の限りで明らかになったのは、スラブ主義と西欧主義の一面性に勝ろうとする土壌主義的な試みの豊かさは、もしも我々が土壌主義を完成した、一義的なイデオロギー的教条として捉えることをやめ、未来へと向けられている現象として見る時にのみ開放されるということだ。

土壌主義はこの時、ロシア文化の自意識の新しい創作的な体験であったということが出来る—2つのイデオロギー的な構造の崩壊の環境—西欧主義とスラブ主義—これらの対立が以前の10年間に渡るロシア社会の精神的な空気を決定付けていた。

また、土壌主義者たちは自らの方向性の文化的な土台を完全にはっきりと意識していた。それは彼らの文学サークルであり、そこで行われた創作や批評の諸活動だった。

そして土壌主義者たちは、ロシアの使命に関する伝統的な問題に関心を向けているということにその誇りの根幹を持っており、プーシキンの出現をその最初のものとして意味づけたのだった。

ドストエフスキーはプーシキンの解釈の縮尺を拡大し、ロシアの詩人に世界的要素、「全人類的な」概念を付け加え、それと同時にそこに最初の土壌主義者を見ているのである。それは同様にある意味においては Григорьев の思想の発達だった。最も本質的だったのは、土壌主義者たちのプーシキンの解釈だった。それは彼らによると、一目瞭然にスラブ主義者と西欧主義者に打ち勝つことが出来るものだった。（ドストエフスキーとグリゴリーエフの視点では、西欧派とスラブ派の二つの派は一様な原因によって一同様に詩人の評価を無視していたのだ。） >

4-6. 土壌主義の4つの特徴

<Wayne Dowlerによって、土壌主義そのものに対して詳細な分析が行われている。⁶⁸論者は、まず土壌主義を上記述べた断絶された両者の和解と克服を目指す、主に雑誌『プレーミヤ』での、イデオロギーのプロセスの絶頂として定義づけている。そして土壌主義の保守主義的イデオロギーの4つの特徴となるものとして、哲学的標準主義、相対主義、内在主義、有機主義の4点をあげている。

まず第一の哲学的標準主義という点においては、土壌主義者達は一貫した反理性主義者たちだった。この感覚において、ドストエフスキーは以下のように書いている。「観念論は感覚を鈍らせ、魅惑し、殺してしまうものだ。⁶⁹」ドストエフスキーは用心深く哲学と社会

⁶⁸Wayne Dowler. (1982). pp. 75-93.

⁶⁹F.M.Dostoevskii, 'Riad statei o russkoi literature. Poslednie literaturnye iavleniia.

的志向における、理論的形態を現実の代わりに用いることに注意深かった：「完全なる現実性における不完全な思考の誤り—そこに人間の過ちの起源が存在する。⁷⁰」理性それのみでは、知識にとっての不十分な基礎を用意するのみなのである。思考は、ストラホフが語るには、単に「生命それ自身や現実性⁷¹」にリンクする時のみ有効的なのである。

第二に、土壌主義者の反理性主義に近いものはその相対主義の理論である。土壌主義は、「世界的人間主義」の理念に対抗して理性主義の中央集権的傾向の批判を志向した。ドストエフスキーが記述するところによると、概念的な人間というものは存在しない；特定の間人達が存在するのみなのである。この相対主義的な非難は勿論ロシアのニヒリストに対して向けられたものであり、土壌主義の見解によれば、彼らは高度に複雑化された国家や人間的有機体の生命を一握りの一般的な衝動と必要性に減少させてしまうのである。

つまりは土壌主義者達は人間的な世界主義には回帰しなかったということだ。「普遍的事実は」、ドストエフスキーは記述している。「ポテンシャルとしては存在しているが現実性としては存在していない。⁷²」ドストエフスキーには、ヘルダーにも存在しなかったように、国家的な排他性は存在しない。ヘルダーはドイツの文化を、フランスの文明化の世界的な要求から守ったのである。同様に、土壌主義はロシアを、普遍的な人間は西ヨーロッパで見つかり、もう既に世界に広まっているという観念から開放しようとしたのである。その代わりとして彼らは、ヨーロッパの観念は単に世界的理念の部分的な表現であり、全ての国家が彼ら自身のユニークな貢献を付け加えるまで完成されることがないと表明したのだ。

土壌主義の3つ目の要素は内在性の観念であり、国家の役割の関連した観点から世界的歴史へと続くものである。各国家は何らかの特別な貢献を人間存在全体に行っているわけだから、特定の観念あるいは原則によって統治されねばならない。国家の運命はそれゆえに国家の本質に含まれるのである。最初には国家の理念は単に無意識的に人間の生命に住み着いた。しかしながら国家の歴史の過程において、それは意識を獲得したのである。国家の知的、社会的、そして政治的な形態と制度はいかなる瞬間においても発達段階において国家的な理念を反映するのである。

4つ目の主な土壌主義の特徴は有機主義である。アポロン＝グリゴリエフの有機的批評が土壌主義に大きな影響を与えていることがその大きな特徴性の一つである。また、バーク以来のほとんどの保守主義と同様に、土壌主義者達も、現在の制度的、文化的、法的、そして社会的協定の合法性を過去における根強さによって判断している。人間と国家は、過去を無視することはできない、なぜならばあらゆる点において、それらはその過去だからである。ストラホフはこう語っている。「ある程度において、人間の生活は既に確立され、それ自身として動いている；もはや単純な生活というものは存在しない。それは歴史的な人生である。人間はそれ自身を土壌や、歴史として形成した。現在において、人間は

Gazeta Den'. 'Vremia(November 1861). sect2 71

⁷⁰Anon[F.M.Dostoevskii]. 'N.A.Dobroliubov.' Vremia(March 1862). sect2 46

⁷¹N.K. 'Literaturnye zakonodateli,'. 118

⁷²Anon[Dostoevskii]. 'N.A.Dobroliubov,'. 45(Dostoevsky's emphasis)

これ以上歴史を除外することができず、人間の世界との関係性を断ち切ることも出来ない
のである。⁷³」 >

4-7. 土壌主義についての総括

Wine Dowlerは土壌主義についての総括を行っている。⁷⁴ <第一に土壌主義という現象が
孤立的現象ではないということが語られる。土壌主義の起源はロシアのロマン主義時代ま
で遡り、その中でその中心的なメタファーであるロシアと西洋というものが形成された。
また、土壌主義とは根本的には西ヨーロッパの保守主義的有機的哲学に影響を受けたもの
である。

また、ドストエフスキーの国家性に関する視点と文学と批評への関連性において、グリ
ゴリエフの有機的批評が起源となっていた。しかしながらドストエフスキーはその形成
においてより広く、表面的なものだった。彼がその死まで抱いていた観念というものは、
ロシアは西と東の思想を和解すべく宿命づけられ、ピョートル大帝の時代からロシアに入り
込んだ新しいロシアの生活の西洋的な要素と和解し、国家的分裂を乗り越えるというこ
とだった。 >

4-8. 「大地」と「世界」

佐伯啓思氏は経済という舞台における『大地的なもの』と『世界的なもの』の二つの要
素の対抗と均衡について論じている。⁷⁵

<まず第一に『大地的なもの』(物財交換モデル)とは、特定の場所(地域、国家など)を
基盤とした生産と生活、そしてそれに関わる交換を軸にする活動。土地と生産のモデルか
ら出発する。土地の改良、労働と生産の効率、その上での生産物の効果的な交換と生活の
安定をテーマとする。「世界」を中に入れてそれを閉じ込めようとする。

そしてまたそれと対照的に、『世界的なもの』(貨幣的交換モデル)とは、グローバルな
シンボル・エコノミーであり、貨幣による交換モデルから出発する。貨幣を獲得し、いか
に流通させるか、またいかにして貨幣価値を増殖させるかをテーマとする。常に空け開く
ことをその本質とする。紙幣の価値の本位となる金自体がそもそも大地と労働と生活から
切り離された余剰物である。⁷⁶ >

私見によると小説『カラマーゾフの兄弟』においても、この両者の対立・葛藤と調和が
小説の大きなテーマとなっているように思われる。小説全体を支配するのは貨幣交換によ
るエコノミーを起点とするプロットであるが、最終的には農耕をシンボルとする大地回帰

⁷³N.K., 'Nechto o polemike.' Vremia(August 1861). sect 2. pp. 147-148.

⁷⁴Wayne Dowler, (1982). pp. 180-184.

⁷⁵佐伯啓思『貨幣・欲望・資本主義』、新書館、2000年より。

⁷⁶『カラマーゾフの兄弟』において金が最もシンボリックに示されているのは第8篇3章の
「金鉱Золотые прииски」の場面である。

をその結末とする。ドストエフスキーは有名なユダヤ人嫌いであったとされるが、土壌主義が資本主義に対するアンチテーゼであったという側面は否定できない。

グリゴリエフは、ストラホフが「世紀」の中で「スラブ主義が勝利した⁷⁷」と宣言した1864年の12月までは生きてはいなかった。このフレーズは結局のところ、グリゴリエフ的な土壌主義の精神の拒否を意味するものだった。しかしながら、土壌主義の真の形は、イデオロギーとしてではなく、資本主義的な世界の流れと、その舞台としての大地、そしてその大地へと回帰していこうという精神性の闘争と融和というドラマ性として芸術の中で表現され、人々の心の中においても現在なお生き続けている。

5. ドストエフスキーにおけるシェリング的問題

ドストエフスキー、グリゴリエフらの土壌主義が、哲学的イデオロギーとして開花したわけではなかったことは明らかであるが、ドストエフスキーがグリゴリエフから受容した有機的批評及び西洋の思想は、ドストエフスキーの文学作品の中において開花を遂げ、彼の作品を普遍的なものとならしめた。その一例として、『カラマーゾフの兄弟』において、シェリングらのドイツ神秘主義思想の概念である無底（Ungrund）の概念が、意味内容の変容を遂げながらも作品内で重要な意味内容を持っている。ゆえに、ロシア及びドストエフスキーにおける無底概念の伝達と変容を論じたい。

5-1. ロシアにおけるシェリング受容

5-1-1. 定着の要因

ドストエフスキーのシェリング受容を分析する前に、研究の手始めとして、ロシアにおけるシェリング受容について触れておく必要があるだろう。幸運なことに、ロシアにおけるシェリング受容については、日本にすでに、坂庭淳史氏の先行研究⁷⁸が存在する。坂庭氏の論文では、愛智会からチュッチェフ、ソロヴィヨフへの思想の伝達が伝えられ、アポロン・グリゴリエフやドストエフスキーへのシェリング受容については触れられてはいないものの、ロシアにおけるシェリング受容については詳細な研究がなされている。ゆえにまず手始めとして、その論文からロシアにおけるシェリング受容について探っていきたい。

まず第一にロシアにシェリング哲学が定着する要因として、プラットによって三つの要因が挙げられている⁷⁹。まず第一は、伝統的なロシア正教である。自然との無意識の合一という本来の状態から意識的な分離を経て、自由に選択された、より高度な自然との合一

⁷⁷Страхов Н.Н. Заметки летописца. Эпоха. 1864. № 12. С. 20.

⁷⁸以下ロシアにおけるシェリング受容の内容は坂庭淳史「ロシアにおけるシェリング哲学—その受容と展開について」『ロシア文化の森へ—比較文化の総合研究』ナダ出版センター、2001年、p111～126、による。

⁷⁹Pratt S. Russian Metaphysical Romanticism. The Poetry of Tiuchev and Boratynskii, Stanford university press, 1984.

へ向かうシェリングの言説は、正教の理解している「救済に至る道」との類似性があるという。宗教と哲学の違いこそあれ、潜在的統一から、理性・意識による分離を経て、より高い統一へ至るという図式には確かに類似が見られる。

第二には、国家意識が挙げられる。シェリングは、「ロシアには偉大な運命が与えられている。その運命はいまだ完全には認識されていない」⁸⁰と語っている。シェリングは、後のスラブ派やロシア・メシアニズムの思想家達の大きな支えとなったのだ。

そして第三には、フリーメーソンの思想である。シェリングは特にミュンヘン移住後（1806）には、フリーメーソンと結びつきの強い中世の神秘哲学者ベーメの思想から影響を受けている。フリーメーソンの思想に熱中していた人々は、その後、同じような土壌を持ったシェリング哲学に自然と移行することが出来たようである。

5-1-2. ロシアにおける導入

シェリング哲学のロシアへの実質的な導入という点では、ペテルブルグではД・ヴェランスキー、А・ガリチの名前をあげることが出来るが、ロシアにおけるシェリング哲学の展開の中心地はモスクワだった⁸¹。その中で重要な役割を果たしたのがモスクワ大学の教授М・パブロフだった。パブロフの活動は大学内のみにとどまらず、「ムネモシュネМнемозина」、「モスクワ報知Московское ведомости」、「テレスコープТелескоп」といったシェリング哲学となじみの深い雑誌や「祖国雑記Отечественные записки」など多くの雑誌に論文を発表するなど、その普及に最も貢献した。

5-2. ドストエフスキーにおける間接受容

Heinrich Stammlerによると、1840年代のペテルブルグにおける文学者としてのドストエフスキーは、何らかのシェリングのシステムを見聞きしていたようであるが、しかしながらシェリングの知識を通じて得たということではないようだ。⁸²また、ドストエフスキーはドイツ語を読んだが、ドイツ語の熟練者には程遠かった。彼がある程度まで熟達した言語というものはフランス語だった。だから彼は、原文でシェリングの哲学を勉強することはほとんど出来なかったという。それに加えて、彼の兄であるミハイルや、哲学者で批評家のストラホフ、グリゴリーエフらと共に雑誌ブレーミヤを編集していた1850年代終わりから1860年代初めにかけて、彼にはほとんどそのための時間がなかった。⁸³さらにドストエフスキーの蔵書にシェリングの書物が存在しないことから⁸⁴、ドストエ

⁸⁰Ibid., p. 21-23.

⁸¹Ibid., p. 25.

⁸²Heinrich Stammler. "DOSTOEVSKY'S AESTHETICS AND SCHELLING'S PHILOSOPHY OF ART" // Comparative literature Vol. 7 (winter 1955) (Eugene: University of Oregon, 1955). pp. 313-323.

⁸³Ibid., pp. 313-323.

⁸⁴蔵書目録はГроссман. Л.П. Семинарий по Достоевскому. М. Петроград. Государственное издательство. 1922.所収のものと、Десяткина Л.П. Фридлендер.

フスキーが直接的にシェリングを受容したということは考えにくい。

モチュールスキーはシェリングの影響を受けた若き詩人、イワン＝シドロフスキーの影響を伝えている。また、⁸⁵Б.Н.Белопольскийは、シェリングの思想は、シェリングの研究者であったИ.И.Давыдовから、グリゴリーエフ、Н.Н.Страховを経てドストエフスキーに伝えられたとしており、⁸⁶ Heinrich Stammerも同様にアポロン＝グリゴリーエフの大きな影響を指摘している⁸⁷。アポロン＝グリゴリーエフがドストエフスキーに与えたのは、彼がモスクワ大学で得た高度な知識と、その知識を応用した文学批評であった。

5-3. グリゴリーエフの有機的批評

ドストエフスキーの諸作品で開花した思想は一見孤立したもののように見えるが、その実は西欧の思想・文学の影響を色濃く受けている。しかし、そのことを説明づけるためにはドストエフスキー1人を論じるのみでは説明付けができない。ドストエフスキーにシェリングの思想を伝達したのはアポロン＝グリゴリーエフただ1人ではなかったが、彼が重要なそのキーマンであったことは間違いない。アポロン＝グリゴリーエフの有機的批評については、望月哲男教授による『有機的批評の諸相』の中で十分な先行研究がなされているので、僭越ながら論文の紹介を兼ねて、ドストエフスキーにおけるシェリングの伝達について探ってみたい。

<『有機的批評の諸相』では序文と1・有機体としての文学、2・グリゴリーエフの芸術観、3・芸術と民族性、4・歴史と文学批評、5・表現としての批評というように内容が構成されている。

まず序文においては、「19世紀ロシア社会思想史において、グリゴリーエフほど複雑な人物は見出し難い⁸⁸」という言葉をもってして、グリゴリーエフが紹介されており、ヘルダー、シュレーゲル兄弟、シェリング等といったドイツ観念論哲学、フリーメーソン思想、無神論、空想的社会主義、ロシア正教、スラブ主義といったような様々な思想遍歴を辿った彼の特異性について触れられている。

1・有機体としての文学では、彼の創作全体、とりわけ文学批評における諸特徴が分析されている。それは彼自身が「有機的批評(органическая критика)」と名付けたものであるが、①芸術作品が生命体(有機体)であるという感覚、②それが人

《Библиотека Достоевского》// сборник. Ред.коллегия:В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования т.4. Л. «Наука». 1980. С. 253-271.を参照
⁸⁵コンスタンチン・モチュールスキー著、松下裕、松下恭子訳、『評伝ドストエフスキー』、筑摩書房、2000年、P16。

⁸⁶Б.Н.Белопольский. Достоевский и Шеллинг // сборник. ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. том8. С.39.

⁸⁷Heinrich Stammer. (1955) pp. 313-323.

⁸⁸Б.Ф.Егоров. (1960). С. 194.

間の「生」（生命及びそのあらわれとしての現象世界）と「土壌」（芸術・芸術家を生み出す歴史的・文化的・民族的環境）とに密接に結びついているという意識、また③芸術作品が永遠なるもの（観念論的・神秘主義的意味づけをもった「生命」あるいは永遠の「理想」）を反映しているという意識、したがって④芸術作品の受容とは分析的な認識行為ではなく、「思弁」「観照」であり、⑤芸術作品は生命そのものと同じ重要な存在意義を持つという帰結、そして最後に⑥この有機的芸術観を表現する文章自体が、具体性と神秘性を内包した用語（「生」「土壌」）や生物学的な比喩（「生み出された」「養液」「花」「種子」「神経網」「根」「枝」）に充たされているという事実である。

このような芸術観は彼固有のものではなく、一つの大きな流れとして存在しているものであり、そのような芸術観の根源として登場しているものは、物語が独立した身体をもつ生き物のような構造を持つべきだというプラトンの比喩⁸⁹、あるいは芸術作品は部分の置換が全体を損なうほどの緊密な構造を持つというアリストテレスの定義である⁹⁰。このような芸術観は長きに渡って多くの芸術家達に受け継がれたという。

2・グリゴーリエフの芸術観では、グリゴーリエフの世界観・芸術観に対する詳細な説明がなされているわけだが、今回特に注目したいのがグリゴーリエフと、シェリングの思想との影響関係である。グリゴーリエフがドイツ観念論哲学の影響を受けたという場合、それを体系的に受け入れ検証したというよりも、その特徴的な思考形式を自由な形で体験し、展開したというほうが正しいという。中でも彼に最も強い影響を与えたのがシェリングであるが、グリゴーリエフはシェリングを「新しい世界のプラトン」「世界最大の思想家」と呼び、⁹¹有機的批評の大きな鉅脈とみなした⁹²。この場合でもグリゴーリエフはシェリング前期の汎神論的な側面と、後期の神秘的な側面とを区別するという考え方には無縁だった⁹³。V・テラスの多少意地悪な見解によれば、シェリングの思想は、美学的なカテゴリーやヒエラルヒーの綿密な検討をぬきにして、魅力的な概念を引き出すことのできる、不定形なものとしてグリゴーリエフに受け入れられたのである⁹⁴。グリゴーリエフが吸収したのはドイツ観念論＝ロマン主義美学に共通の精神であったが、そのもとにあるのは、あらゆる存在の根源的同一性を説くシェリングの「同一哲学」的発想だった。グリゴーリエフはあらゆる現象の根底にある「単一なるもの」を想定したが、レーマンはそこにシェリングの『神話と啓示の哲学』の影響を指摘している⁹⁵。グリゴーリエフが観念論的な芸術観、例えば「（詩とは）有限なるもののうちに無限と有限との統一体を実現するものである」（シ

⁸⁹プラトン、『パイドラス』、264C。

⁹⁰アリストテレス、『詩学』、第8章51a32-35。

⁹¹Ап. Григорьев. Литературная критика. под ред. Б.Ф.Егорова. (Москва,1967). С. 134.

⁹²Ап. Григорьев. Эстетика и критика. под ред. А.И.Журавлевой,(Москва,1980)

⁹³Там же. С. 164.

⁹⁴V.Terras. 「Apollon grigor'ev's Organic Criticism...」 p. 77.

⁹⁵T.Lehmann. op. cit, pp. 63-67.

ェリング)⁹⁶といった考え方を、生の神秘に対する実感を介してとらえ、自己の言葉で語っているということは確かであろう。

さらに、グリゴリエフ自身も、「シェリング主義は、(古いものも、新しいものも、すべて1つにまとめて) 私にとっても深く浸透した—それは無秩序な、果てしのないものだったが、というのもそれは理論ではなくて、生命だったからだ。」⁹⁷と記述している。>ドストエフスキーは、シェリングの思想をアポロン=グリゴリエフや、その他のシェリングに影響を受けた人物達から、テキストには残らない形、伝聞や会話を通して、や彼らの作った詩作などを読むといった形で受け継いでいったのであろう。

5-3. 無底の変容

5-3-1. 無底 (Ungrund) 概念

シェリングの「無底Ungrund」観念は、ヤコブ・ベーメの神智学の深い影響の下でシェリングの自由論の内に摂取された言葉の一つである⁹⁸。それは、「すべての根底の以前に、またすべての実存するものの以前に、従って総じてすべての二元性の以前に、一つの存在者がなければならぬ」⁹⁹、として措定される。歴史において創造、行為を考える際に、その根拠、根底を求めるのは当然であるが、この一般的な根拠づけの考え方には、根拠づけるものと根拠づけられるものという二元的対立が前提とされている。しかし、この二元的対立そのものもまた根拠づけられねばならないということになれば、無限に続く背後遡行は避けられない。そこで、シェリングはそのような背後遡行の外に出て、あらゆる対立に先行する「無底」という存在者を考える。そこにおいては、あらゆる二元性が存在しないのであるから、もはや根拠づけという考え方そのものも存在しない。従って、文字通りの根底なき「無底」があるのみである¹⁰⁰。

5-3-2. 無底 (Ungrund) から無底 (бездна) へ

ロシア語訳された『人間的自由の本質』¹⁰¹においては、無底 (Ungrund) 概念は、безосновноеという訳を受けている。しかしながら、五島氏によると『人間的自由の本質』

⁹⁶F.W.Schelling. Philosophie der kunst. in Schellings werke. in 14 vols. ed. by Manfred Schroter, vol. 3(Munich,1927). pp. 476,478.

⁹⁷Григорьев А.Воспоминания. Л. 1980. С. 301.

⁹⁸上田閑照編、「無底—シェリング『自由論』における」『ドイツ神秘主義研究』、創文社、1982年。

⁹⁹F.W.J.Schelling. Werke.Hrsg.v.K.F.A.Schelling. Stuttgart. 1856-1861(以下、SWと略記し、巻号をローマ数字、ページ数をアラビア数字で付す)VII. 391. シェリング『人間的自由の本質』、西谷啓治訳、岩波文庫、1951、P145。

¹⁰⁰橋本崇、『偶然性と神話：後期シェリングの現実性の形而上学』、東海大学出版会、1998年。

¹⁰¹Сочинения в двух томах. Фридрих Вильгельм Йозеф Шеллинг. Москва. Изд-во "Мысль". 1987.

のロシア語訳である**Философские исследования о сущности человеческой свободы**は、ドストエフスキーの死後 27 年経った 1908 年に刊行されている¹⁰²との事であるから、この訳語は参考にはならない。ドストエフスキーの日記・評論等を含めた全ての文章の中においても**безосновное**という言葉が登場していないことから¹⁰³、この**безосновное**という概念自体がドストエフスキーには存在しなかったであろう事は、容易に推測できる。それでは、ドストエフスキーやアポロン＝グリゴリエフに受け継がれた無底（Ungrund）のロシア語概念は何であったか？ここで五島氏は無底（Ungrund）にあたる語訳として、グリゴリエフの詩作品に多作された**бездна**の概念を挙げている。¹⁰⁴この論に関しては、目下のところ筆者も同意である。参考に、この**бездна**という言葉を用いたグリゴリエフの詩を紹介しておこう。

「貴女はいつかすべての無底を抱くだろうか
灼けつくがごとき苦しみとその永遠の熱病を、
善悪の無底の混沌を、
神秘の難題を追い過ぎた魂が
狂気のうちに使い果たしたすべてを、
果てなくも怖ろしき熱情と墮落を、
そして貴女は耳傾けるだろうか、不満に、哀願に、
愛の頌歌（ヒムン）に、流神のうめきに、——
おお、私は信じている、貴女がこの暗い地獄にあって
愛と調和の光で照らしてくれることを……
純潔にして清らかな祈りもて
あたかも癒しの水のように、
四大ウルカヌスの盲いた轟く火に水そそぎ、
敵性の権力（ちから）に魔法をかけてくれることを。
おお、祈りたもう！……

Когда бы ты всю бездну обняла
Палящих мук с их вечной лихорадкой,
Бездонный хаос и добра и зла,
Все, что душа безумна прожила
В погоне за таинственной загадкой,

¹⁰²五島和哉氏修士論文、「ドストエフスキー創作中期における病気哲学の展開」、

<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~kazuya5/dostoevsky.html>

¹⁰³Статистический словарь языка Достоевского. А.Я. Шайкевич. В.М. Андрющенко, Н.А. Ребецкая. Москва. Языки славянской культуры. 2003.

¹⁰⁴五島和哉氏修士論文、「ドストエフスキー創作中期における病気哲学の展開」、

<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~kazuya5/dostoevsky.html>

Порывов и падений страшный ряд,
И слышала то ропот, то моления,
То гимн любви, то стон богохуления,—
О, верю я, что ты в сей мрачный ад
Свела бы луч любви и примиренья...
Что девственной и чистою мольбой
Ты залила б, как влагою целебной,
Волкан стихии грозной и слепой
И заклала бы силы власть враждебной.
О, помились...!» (「放浪するロマン主義者の即興詩」 4 より) ¹⁰⁵

「奥ふかい暗闇である、しかし其処からは
あなたの純潔で、病的に透きとおる
深遠なる神秘に息づく顔 (かんばせ) が浮かびあがっていた……
奥ふかい暗闇である、そして暗黒の無底より
出で来たるあなたは、あたかも日没の光のように、光り輝いていたのだ
Глубокий мрак, но из него возник
Твой девственный, болезненно-прозрачный
И дышащий глубокой тайной лик...
Глубокий мрак, и ты из **бездны** мрачной
Выходишь, как лучи зари, светла;」¹⁰⁶

この観念は、グリゴリエフの詩の中では、善と悪と分裂以前の原初形態として純粋に受け入れられたようである。それではこの概念はドストエフスキー、特に『カラマーゾフの兄弟』ではどのように受け入れられていたのだろうか？

コンコーダンスから探っていくと、Бездна という言葉は作品内に19回登場する。少し冗長ではあるが、その全場面を探っていくことにしよう。

①Потому что если уж полечу
в **бездну**, то так-таки прямо, головой вниз и вверх пятнами, и даже
доволен, что именно в унижительном таком положении падаю и
считаю это для себя красотой. (14、99)

¹⁰⁵Григорьев А.А. Стихотворения и поэмы. М. Современник. 1989. с.156-157.翻訳は五島和哉氏による。

¹⁰⁶Григорьев. Стихотворения и поэмы. 1989. С. 155.

どうせ奈落に落ちるんなら、いっそまっしぐらに、頭からまっさかさまにとびこむほうがいい、まさにそういう屈辱的な状態で墮落することこそ本望だ、それをおのれにとっての美とみなすような人間だからなんだ。

②Хотя бы и жизнь свою рад был отдать за других, но уже нельзя, ибо прошла та жизнь, которую возможно было в жертву любви принести, и теперь **бездна** между тою жизнью и сим бытием". (14, 293)

他人のために自分の生命を喜んで捧げたいところなのに、もはやそれもできないのだ。なぜなら、愛の犠牲に捧げることでできたあの生活は、すでに過ぎ去ってしまい、今やあの生活とこの暮らしの間には深淵が横たわっているからだ。

③И один лишь сей вопрос, повторяясь постепенно, породил наконец целую бездну самой ненасытимой злобы. Вот почему и думаю я, что многие, заслышав тлетворный дух от тела его, да еще в такой скорости (14, 299)

この疑問一つだけでも、しだいに反覆されてゆくうちに、ついには飽くことを知らぬ憎悪の深淵を生みだしたわけだ。

④О, он плакал в восторге своем даже и об этих звездах, которые сияли ему из **бездны**, и "не стыдился иступления сего". (14, 328)

そう、彼は歓喜のあまり、無窮の空からかがやくこれらの星を思つてさえ泣いたのであり、《その狂態を恥じなかった》のである。

⑤человек,наделавший **бездну** подлостей, но всегда бывший и оставшийся благороднейшим существом, (14, 416)

数限りない卑劣な行為をやりながら、常に高潔きわまる存在であり続けた人間だって事です。

⑥все это вдруг раскрыло пред Алешей такую **бездну** безвыходного горя и отчаяния в душе его несчастного брата, какой он вдруг и не подозревал прежде. (15, 36)

これらすべてが、不幸な兄の心にある、これまで考えてもみなかったような、やり場のない悲しみと絶望の深淵を、突然アリョーシャの前に開いて見せたのだった。

⑦такие **бездны** веры и неверия могут созерцать в один и тот же момент, что, право, иной раз кажется, только бы еще один волосок - и полетит человек "вверх тормашки", как говорит актер Горбунов. (15, 80)

とにかく同じ瞬間に信と不信のすごい深淵を見つめることが出来るわけだから、実際、時によると、あとほんの一押しで、役者のゴロゴーフの台詞のように、その人間が《まっさかさまに》転落するような気がすることもあるんだよ。

⑧Но сердце ревнивой женщины уже разгорелось, она готова была полететь

хоть в **бездну**... (15, 114)

だが、嫉妬深い女性の心はすでに燃えさかっており、彼女はたとえ奈落にでもとびこみかねぬ勢いだった…

⑨～⑬ - я ведь к тому и веду, - способные вмещать всевозможные противоположности и разом созерцать обе **бездны**, **бездну** над нами, **бездну** высших идеалов, и **бездну** под нами, **бездну** самого низшего и зловонного падения. (15, 129)

わたしの言いたいのは、まさにこの点なのですが、ありとあらゆる矛盾を併呑して、頭上にひろがる高邁な理想の深淵と、眼下にひらけるきわめて低劣な悪臭ふんぷんたる墮落の深淵とを、両方いっぺんに見つめることが出来るからであります。

⑭～⑮ Две **бездны**, две **бездны**, господа, в один и тот же момент - без того несчастны и неудовлетворены, существование наше неполно. (14, 129)

二つの深淵です、みなさん、二つの深淵を同時に見ること、これがなければ彼は不幸であり、満足できず、彼の存在は不十分なものとなるのです。

⑯～⑰ Две **бездны**, господа присяжные, вспомните, что Карамазов может созерцать две **бездны**, и обе разом! (15, 147)

二つの深淵であります、陪審員のみなさん、カラマゾフが二つの深淵を、両方いっぺんに見つめることができる人間であることを、思い起こしてください！

⑱～⑲ Но ведь сами же кричали, что широк Карамазов, сами же вы кричали про две крайние **бездны**, которые может созерцать Карамазов.

Карамазов именно такая натура о двух сторонах, о двух

безднах, что при самой безудержной потребности кутежа может

остановиться, если что-нибудь его поразит с другой стороны. (15, 159)

しかし、カラマゾフは広大だと叫んだのは、あなた自身ではありませんか。カラマゾフは二つの深淵を見つめることが出来ると絶叫したのは、あなた自身ではないでしょうか？カラマゾフはまさしく二つの面を、二つの深淵をそなえた天性であるため、抑えきれぬ遊興の欲望にかられた際でも、もしもう一つの面から何かに心を打たれたならば、踏みとどまることのできるのです。

作品内に登場する **бездна** という言葉の中においては、二元的対立に先行する純粋な哲学的概念としての無底概念という意味で、**бездна** という言葉が使われているとは言いがたい。ドミートリー＝カラマゾフのモデルがアポロン＝グリゴーリエフであったことを考えると、ドミートリーの台詞であった①などには、ドストエフスキーが意識的にグリゴーリエフの詩作品等からの **бездна** のイメージをそのまま用いたということも十分に考えられうるが、しかしながら、⑨～⑬までは両方の深淵 **обе бездны**、⑭～⑲まででは、**Две бездны** (二つの深淵) という語の用いられ方がされている。ここでは、先程のシェリング的な用

法とは異なり、бездна という言葉自体が二項対立する二元的なものとして表されている。ここには、シェリング概念の伝言ゲーム的な間接受容による変化が見られるとあってよい。

5-4. 『カラマーゾフの兄弟』における解決

「しかし無底が二つの同様に永遠なる元初に分かれるのは、ひとえに、それが無底であるかぎりそのうちで同時に存在することも一であることできなかつたかの二者が、愛 (Liebe) によって一とならんがためのものである。」¹⁰⁷シェリングは、愛によって善と悪が再結合することを、この世の生の目的であるとして、生を意味づけした。辻村公一氏もまた、シェリングにおける愛を「区別された相互に独立なる両原理を結合すること」としている¹⁰⁸。『カラマーゾフの兄弟』においてもまた、大地回帰のメタファーを通して、ソドムの理想とマドンナの理想の二つの深淵が愛によって結合される様が描かれ、その両者を包含する人間的な広大さとしてのカラマーゾフ性が礼賛されるのである (15, 197)。しかしながらこの愛という概念においても、シェリングとは概念の用いられ方は微妙に異なっている。

Карамазов именно такая натура о двух сторонах, о двух безднах, что при самой безудержной потребности кутежа может остановиться, если что-нибудь его поразит с другой стороны. А ведь другая-то сторона - любовь, именно вот эта новая загоревшаяся тогда как порох любовь

「カラマーゾフはまさしく二つの面を、二つの深淵を見つめることができると絶叫したのは、あなた自身だつたではないでしょうか？カラマーゾフはまさしく二つの面を、二つの深淵をそなえた天性であるため、抑えきれぬ遊興の欲望にかられた際でも、もしもう一つの面から何か心被打れたならば、踏みとどまることができるのです。そのもう一つの面とは、愛です。まさにそのとき、火薬のように燃えあがった愛情であります。」(15, 159-160)

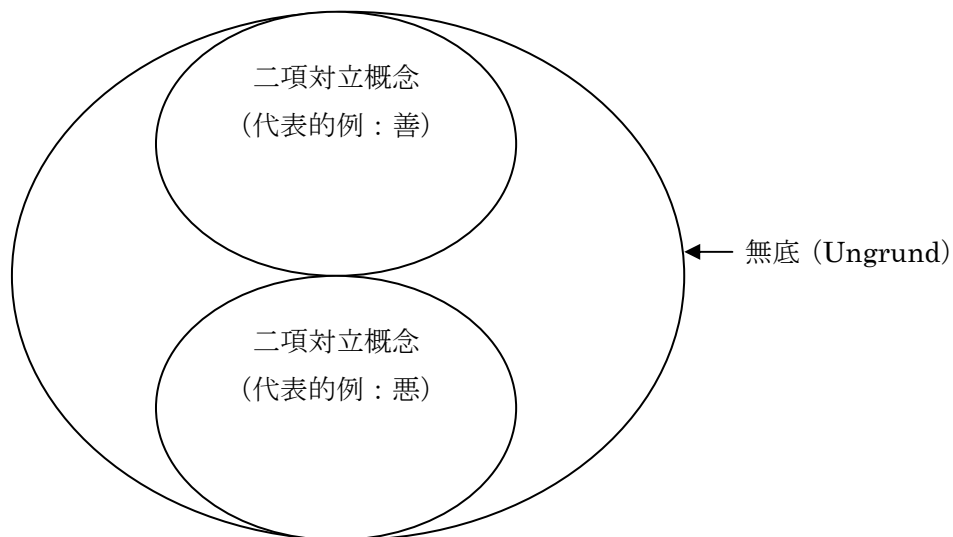
ここでは、二元的対立として用いられている二つの概念は、遊興の欲望 (потребность кутежа) と愛 (любовь) であり、シェリングの愛の概念とは用いられ方が異なる。この部分をとってみても、ドストエフスキーが純粋なシェリング主義者ではなかつたということが十分に伺えるのである。そしてさらに、その二元対立項を包含する存在として、シェリングにおける愛という概念の代わりに、カラマーゾフ性 Карамазовщина という用語が用いられている。このカラマーゾフ Карамазов という言葉にはとても多義的かつメタフォリックな表現が用いられていることは江川卓氏の著作の中で詳しい。

¹⁰⁷ S W VII. 408 シェリング、『人間的自由の本質』、西谷啓治訳、岩波文庫、1951、p 148。

¹⁰⁸ 上田閑照編、「無底—シェリング『自由論』における」、『ドイツ神秘主義研究』、創文社、1982年、P613。

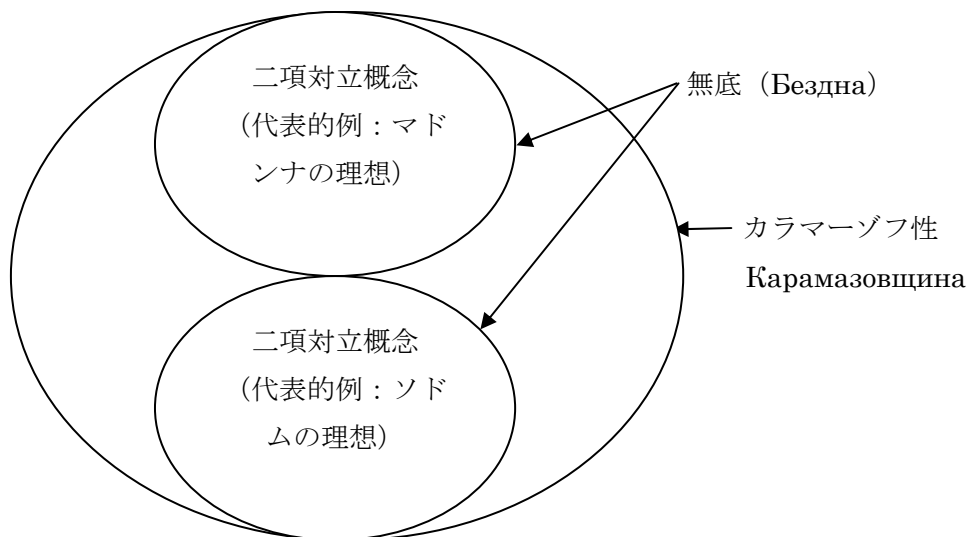
しかしながら使用した概念の違いはあるが、根本的な思想的類似は明らかに見られる。
最後にシェリング概念とドストエフスキー概念の相違を図にまとめてみたい。

シェリング



*二項対立を結合させる力が愛 (Liebe) として表現される

ドストエフスキー



6. カラマーゾフシナКАРАМАЗОВЩИНА

小説『カラマーゾフの兄弟』においては、カラマーゾフという概念が多義的でシンボリックかつ空間的で広大な、ソドムの理想とマドンナの理想の 2 つの無底をも包含する意味作用を形成している。また、Николай Подосокорскийは、カラマーゾフ性を 6 つの要素で

表現している。¹⁰⁹

その第1は、《カラマーゾフ的思考》であり、批評においては人間の魂の2つの深淵に関する長篇として確立している《カラマーゾフの兄弟》の理解において、カラマーゾフは《カラマーゾフ的》なものを持ち主として、最初から2つの深淵の中間に位置しており、時とともに片方からもう片方へと動いている。私達の上にあるものは一天と神であり、私達の下にあるものは一大地と悪魔である。《カラマーゾフ的な思考》とは、2つの深淵を俯瞰する能力であり、我々にとってはカラマーゾフ的なものの原則だ。そのカラマーゾフの原則の後で選択の不可欠性に立ち、私達の上の深淵、あるいは私達の下の方の深淵、そしてソドムの理想とマドンナの理想のいずれかを選択しているという。

第2は《カラマーゾフ的問題》であり、それは神と不死の問題であり、信仰と不信仰の問題であって長篇におけるキーとなっている。しかしながら最終的に作り出されている印象は、長篇の終わりに《カラマーゾフ的問題》が止み、信仰が不信仰に打ち勝っているというものだ。フォードルとスメルジャコフは死に、イワンに関しては、精神的な健康に関するかすかな期待が存在し、最終的にはゾシマ長老とイリュシェニカはまさに一粒の小麦のように死後において沢山の果実を、信仰の果実を残すのだ。

第3は《カラマーゾフ的情熱》である。信仰と不信仰の《カラマーゾフ的問題》を不真面目に考えながら、カラマーゾフ達は私達の下にある深淵と、ソドムの理想を伴ったその深淵に固有の美しさを選び好んでいる。《カラマーゾフ的な情熱》は、彼らを我々の下方に存在する深淵への果てしのない墮落に伴なわせる。

第4は《カラマーゾフ的良心》であり、それは人間の持つ善の感情であり、我々の下方にある深淵を自ら選択するカラマーゾフ達は、《カラマーゾフ的良心》によって、次第にその《愚かな悪魔》、《知恵の病気》、そして《カラマーゾフ的情熱》に打ち克つ。《カラマーゾフ的良心》は、私達の上にある深淵を志向しており、それは、《カラマーゾフ的情熱》が私達の下にある深淵を志向しているのと同様である。ついには《カラマーゾフ的良心》は、神に対する信仰に到達するのだが、カラマーゾフ的情熱と良心の合体は、神と悪魔が人間の心で行なう戦いなのだ。

第5は《カラマーゾフ的力》である。カラマーゾフがもっとも凶暴な淫蕩の恥辱にまみれながら、我々の下にある深淵に落ちているときに、《カラマーゾフ的な力》はその方向に向かう底なしの動力を提供する。しかし神と不死の信仰の方向へ向かう《カラマーゾフ的良心》が目覚めるとき、《カラマーゾフ的力》は新しい概念《カラマーゾフ的精神》の力を獲得する。このような《カラマーゾフ的精神》の力は、永遠にカラマーゾフを称揚し

¹⁰⁹Николай Подосокорский. ЧТО ТАКОЕ «КАРАМАЗОВЩИНА»? // Достоевский и мировая культура. Общество Достоевского. Московское отделение Общество Достоевского. Комиссия по изучению творчества. Ф.М. Достоевского. Института мировой литературы им. А.М. Горького РАН. No. 14. Москва. 2001. С. 304-314.

つづけ、突進的に彼を我々の上方の深淵に差し向ける。

第6は《カラマーゾフ的規模》であるが、А.К.Толстой の詩が《カラマーゾフ的規模》の本質を伝えているという。

愛するとなったら理性を失うほど
脅すとなったら冗談にならないほど
叱るとなったら、見境なく
ぶった切るとなったら、思いっきり

口論するとなったら、勇気を持って
報復するとなったら、理由のあるとき
頼むとなったらすべての心で
宴会となれば大宴会¹¹⁰

6-1. マドンナ（聖母）の理想

小説『カラマーゾフの兄弟』における聖母についての言及はイワン・カラマーゾフが物語る台詞である。

「聖母が地獄を訪れ、大天使ミハイルの案内で『苦悩』を見てまわる。さまざまな罪びとやその苦しみを見るのだが、その中に、火の池に落ちたきわめて注目すべき範疇の罪びとがいるのだ。彼らのうちにはその池に深く沈んで、二度ともう浮かび上がれぬような連中もいて、『神もすでに彼らを忘れたもう』一実に深みのある力強い表現だろう。ところで、はげしく心を打たれた聖母は、泣きながら神の御座の前にひれ伏して、地獄に落ちたすべての者に、自分が地獄で見たすべての者に、分けへだてなく、恵みを乞う。…聖母は懇願し、立ち去ろうとしない。そして神が、聖母の息子の釘付けにされた手足をさし示して、あの子の迫害者たちをどうして許せるだろうとたずねたとき、聖母はすべての聖者や、殉教者、天使、大天使たちに、自分と一緒にひれ伏して、分けへだてなくすべての者に恵みを乞うよう命ずるのだ。こうして結局、聖母の願いは神にきき入れられ、毎年、神聖金曜日から精霊降臨祭まで、地獄の責苦は休止されることになるのだが、ここで地獄の罪びとたちは神に感謝して、『主よ、こう裁きたもうたあなたは正しい』と叫ぶんだよ。」（14, 225）

ドストエフスキー研究者ヴェトロフスカヤがロシアでいち早くこのテーマに目をつけている。¹¹¹彼女によると、この台詞の起源となっているのは大天使であるミハイルの同伴で、聖母マリアが地獄を巡るというアポクリファ（聖書外典）であるという。理念的な精神的、

¹¹⁰Толстой А.К. Полное собрание стихотворений в двух томах. Ленинград. Ленинградское отделение. 1984. том.1. С.57.

¹¹¹В.Е.Ветловская. Идеал мадонны в Братьях Карамазовых. Достоевский. Материалы и исследования том15. С. 305-326.

肉体的な美の具現化のほか、聖女マリアは、それ自身が持つほかの性質において小説の中に現れる。嘆き悲しむ母なる神（これは十字架を抱いている「Mater Dolorosa」であり、ゾシマ長老の庵室にあったものだった。—14, 37）としてであり、人類の庇護者としてもある。詳しく説明すると、ミーチャは恐ろしい罪や犯罪にこらえながらそれでもやはり父を殺しはせずに、こう語っている。「…誰の涙のおかげか、僕の母が神に祈ってくれたのか、あの瞬間聖霊が僕に接吻してくれたのか、わかりませんが、とにかく悪魔は敗れたのです。」（14, 425—426）その時彼を保護するものは何一つなかったが、彼には勿論、彼の庇護者である聖母、母なる神がいたのである。自分の罪の自覚（より高い理念の条件においてのみ可能である）と贖われた苦しみが人に天上の力と幸福の勝利、またそれと同時に一聖母とマドンナの横顔に秘められたもっとも明るい、人生を肯定する完全な美が与えられるという。

6-2. ソドムの理想

「高潔な心と高度な知性を備えた人間が、マドンナの理想から出発しながら、結局はソドムの理想に終わってしまう」（14, 100）

卒業論文では、『カラマーゾフの兄弟』の第8篇、7章の『まぎれもない以前の男 ПРЕЖНИЙ И БЕССПОРНЫЙ』、8章の『悪夢 БРЕД』に当たるモークロエ村の場面を、ドストエフスキーの人物配置の意図という観点からカーニバル論と聖書『ソドムの滅亡』のパロディという異なる2つの論点によって分析した。混乱の中でポーランド人が語る言葉である「まるでソドムだ！ - То есть содом! -」（14, 388）という言葉を持つまでもなく、この場面はまさにソドム的な場面である。また、父親殺しの容疑で捕らえられたドミートリーの裁判の場面、第12編「誤審」の中の第13「思想の姦通者」のなかで、弁護人の発言の中にソドムに関連する台詞が登場する。それは「《金属》や《硫黄》"металла" и "жупела"」という言葉で、生格の形で二度登場する。（15, 170 : 171）オストロフスキーの戯曲「重苦しい人々」の中の台詞であり、この場合の「硫黄」は旧約聖書「創世記」でソドムとゴモラの街を焼いた硫黄のことであるという。

このドンちゃん騒ぎの場面ではソドム的な一種のカーニバル空間が形成され、オルギヤ¹¹²が繰り広げられる。このオルギヤは、父親であるフォードル＝カラマーゾフの死、ポーランド人の排除という、いわゆる「王の死」を起因とするわけだが、より大きな秩序、す

¹¹²オルギヤの宗教学的な儀礼的な機能の研究に関してはエリアーデ著、『大地・農耕・女性：比較宗教類型論』、堀一郎訳、未来社、1968年、を、また文化人類学的な視野から見た研究についてはロジェ・カイヨワ著、『人間と聖なるもの』、せりか書房、1994、Roger Caillois. *L'homme et le sacré*. Ed. augm. de trois appendices sur le sexe, le jeu, la guerre dans leurs rapports avec le sacré. (Paris. Gallimard, 1950). を、さらに哲学的視野をも含んだ研究についてはG・バタイユ著、湯浅博雄・中地義和訳、『エロティシズムの歴史』、哲学書房、2001年、Georges Bataille, *L'histoire de l'erotisme, La Part maudite générale, tome II*, Oeuvres complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard. 1976. を参照されたい。

なわちこの場面における警察権力の登場、罪の執行という現実へと回帰されてゆくのだが、幻想的な場面がその中に登場することも確かである。それは、作品内の登場人物たちがその場面において、内的な一種の聖性を体現し、その聖性に同調する読者がカタルシスを得ているのではないかと考えられる（後述）。

6-3. マドンナの理想、ソドムの理想両者の肯定

そして、このモークロエ村の場面は「ロシア文学全体を通して、詩的な美しさの点でドストエフスキーのこの場面に優る頁を見つけだすことは出来ない。これは凍てついた空間を自分自身の響きでみたすロシアの天才、ロシアの魂の幻覚である」¹¹³とウオルィンスキーによっても述べられている。また、この場面での「あたしが神様だったら、全ての人を許してあげるのだけれど、『愛すべき罪人たちよ、今日以後みんなを許してあげるわ』って。…あたしたちは汚れていても、この世は素敵だわ。あたしたちだって汚れていても、いい人間なのよ。汚れてもいるし、いい人間でもあるってわけ…」（14、397）という台詞は聖母のような響きを読者に与えている。

6-4. カラマーゾフシナとロシアの大地の同一性

ここで指摘しておきたいのはマドンナの理想とソドムの理想という二項対立の存在が、人間の空間的な広大さの中に包括されているということだ。「いや、人間は広いよ。広すぎるくらいだ。俺ならもっと縮めたいね。」（14、100）カラマーゾフシナとは人格的な広大さのシンボリックな表現なのである。「ふつう人生では両極端の中間に真実を求めねばならないのが常であります、この場合は文字通り違います。何より確かなことは、最初の場合に彼が心底から高潔だったのであり、第二の場合には同じように心底から卑劣だったということであります。これはなぜか？ほかでもありません、彼が広大なカラマーゾフ的天性の持ち主だからであり…ありとあらゆる矛盾を併呑して、頭上に広がる高邁な理想の深遠と、眼下にひらけるきわめて低劣な悪臭ふんぷんたる墮落の深淵とを、両方いっぺんにみつめることができるからであります。」（15、129）そしてこの人格的な広大さは、ロシアの大地と結び付けられる。「私たちは広大です、母なるロシアと同じように広大であり、すべてを収容し、すべてと仲よくやっつけていけるのであります。」（15、129）この言葉は大地と世界との和解そのものをも意味する。

7. 作品内における神概念の機能

本論では、『カラマーゾフの兄弟』の主人公ドミートリー・カラマーゾフと比較して、贈与と自己所有化の過程における神の機能的役割及びその死の問題について取り上げてみたい。論考の際には、主にフランスの思想家バタイユ乃至は彼の研究者である湯浅博雄氏に

¹¹³ウオルィンスキー著、川崎侠訳、『カラマーゾフの王国』、みすず書房、1974、P22。

よるテキストを主な比較検討の対象とする。¹¹⁴思うにそもそもドストエフスキー以前に例えばカントなどによってすでに神の存在証明の不可能性は提示されているが¹¹⁵、しかしながらここでは贈与という社会的行為の際に神という概念が及ぼしうる機能に関する考察を起点として論考を行いたい。

7-1. 贈与の問題

まず最初に贈与の性質についてまとめておきたい。湯浅氏によると、『贈与論』¹¹⁶が明らかにするとおり、〈贈与〉するということは、その時点では、自分の手にしている富を失う危険にさらされることである。とはいえ、そうした消失の危険と放棄に沿う仕方、いわゆる交換の過程が発展したことも確かである。なぜなら贈り物を受けた人間は、そのままではすまず、必ず返礼の贈与によって戻すからである。贈与された人間はそんな恩恵を負い目のように感じており、自分も〈贈与の運動〉に参加しない限り、つねに負債をおったままになってしまう。贈与giftはある〈毒〉giftを含んでおり、その恩義＝負債をはらすことができるのは、ただ（受贈したものよりも）もっと貴重な物を贈与することによってだけなのである。〈固有なもの〉はいったん手放されるけれども、迂回路をたどったあと、必ず回収され、また自己所有化される。それゆえ後代のエコノミーの観点から見れば、一種の「利子付きの信用貸し」のように思える。ただし文書による契約に基づくのではなく、つねに〈心的な恩義＝負債感〉に結ばれた黙契に他ならない。¹¹⁷

ドストエフスキー作品『カラマーゾフの兄弟』においても贈与という行為がプロットを構成する大きな鍵の1つになっている。

具体的にその内容を挙げるならば、まず第一にドミートリー・カラマーゾフがカテリーナ・イワーノブナに5000ルーブルを贈与し、その行為がその後のプロポーズ・婚約等の一連の出来事の起因となっている。

また、ドミートリー・カラマーゾフがグルーシェニカにモークロエ村などで贈与を行い、それが両者の恋愛におけるプロットを決定付けている。

7-2. 神の機能＝純粹贈与を可能にする

¹¹⁴ このような研究に類するものとしては、すでに和訳されている著作としてはゴロソフケル著、木下豊房訳、『ドストエフスキーとカント：『カラマーゾフの兄弟』を読む』、みすず書房、1988年、ワルター・シューバルト著、駒井義昭訳、『ドストエフスキーとニーチェ：その生の象徴するもの』、富士書店1982年、などがあげられ、またВ.А.Батинин. Достоевский и Гегель. сборник. ред. Коллегия. В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования. Ленинград. Изд-во Наука. 1974. том3.やХорст-Юрген Геригк. (2002).などが存在する。

¹¹⁵カント著、篠田英雄訳、『純粹理性批判』、岩波書店、1961年。

¹¹⁶マルセル・モース著、有地享訳、『贈与論』、勁草書房、1962年。

¹¹⁷湯浅博雄、『聖なるものと永遠回帰』、ちくま学芸文庫、2004年、PP92-93より要約。

贈与における神概念の機能とは、交換性を暗黙のうちに期待する贈与の本質を盲目にする効果であると考えられる。

「…純粋に贈与するという事は、どこかで何かに役立つ事のない仕方で、つまりなにも生産に役立たず、有用性や功利性は無縁な仕方で手放し、消尽するという事である。贈与を行なう者（贈与する主体）へと戻ることのない、まったくの放棄としての贈与になることである。しかし、後に来る時には必ず神から恩恵＝恩寵という返礼贈与を受け取るはずだと、〈暗黙のうちに期待している〉ことになる。しかも、こうした暗黙の期待が、贈与の純粋性を汚染していることには気付かないのである。そして、実はそういう〈純粋な〉贈与＝消尽は、神的次元を超越項として前提にしている限り、贈与の仮象であって、純粋な贈与ではなく、ある種の交換であり、エコノミーの円環のうちに収まることに盲目となる、ということである。」¹¹⁸と湯浅氏は語っているが、『カラマーゾフの兄弟』における神に関するフォードルとイワンとの会話も紹介しておきたい。「残念だな。畜生、そう言われたんじゃ、最初に神なんてものを考えだしたやつを、俺はどうしてやりゃいいんだい！ヤマナラシの木に縛り首にしても、まだ物足りないっていうのに」「もし神を考え出さなかったとしたら、文明も全然なかったでしょうね」（14、124）。いうなれば、神という概念が社会的交換における贈与行為を正当化し、また神からの恩恵が、非贈与者からの返礼贈与を見かけ上肩代わりする担保として社会円滑化のために機能する。

『カラマーゾフの兄弟』においても、ドミートリーが返礼を期待できない贈与を行おうとする場面で神への言説が見られる。この際の神に対する言説において、無意識的に贈与を合目的化し、その返礼贈与を補償する役割としての神が存在している。少なくとも作品内において、心理的な極限状況に追い込まれた主人公が、超越的概念（この場合では神）を想定することによって、行動規範におけるタブーを乗り越えようとする状況が観察される。

7-3. 自己所有化への帰結（神の死）

作品内においては当初は神を審級者に見立て、自己の死を引き換えにした純粋な消尽＝贈与として行なわれたモークロエ村での狂乱の宴の果てに、ドミートリーはグルーシェニカの心を手に入れてしまうというプロットになっているのだが、そのことによって、彼が行なった贈与は回収され、エコノミーの円環に再びとらわれる事となる。その後のドミートリーの告白¹¹⁹の中で明らかな通り、純粋な贈与を行っていると思えることを可能にする

¹¹⁸湯浅博雄、『聖なるものと永遠帰郷』、ちくま学芸文庫、2004年、PP102-103より要約。また、宗教と贈与に関連した文献としては、ジョルジュ・バタイユ著、湯浅博雄訳、『宗教の理論』、筑摩書房、2002年、または中沢新一著、『愛と経済のロゴス』、講談社、2003年等を参照されたい。

¹¹⁹『神さま、塀のわきに倒れた老人を生き返らせてください！この恐ろしい運命の杯を、素通りさせてください！神さま、あなたはわたしのような罪びとたちのためにも、数々の奇跡をして下さったではありませんか！…でも、だめだ、だめだ、ああ、とうていあり

神の機能はそこで停止し、まさしく神は死んだものとなるのである。

神の機能を失った贈与の諸行為は「繰り返して行われる一方的なサービスの供給は権力の源泉である。というのも、そのような供給は、それに品物で返礼できない人々を義務付けて、供給者の願望に従うことによって彼への義務を果たさせる」¹²⁰ 社会関係における欲望の充足行為に帰結する。

つまりは、どのような思考と感情の遍歴を伴おうとも、結果的には贈与の性質上、自己への還元を期待する社会的行動にしかすぎないのであり、上述したとおり神の概念は返礼を無意識のうちに期待する贈与の仮象としての、言語ゲーム内における超越的記号としての機能的役割にとどまらざるを得ない。今回の論考ははなはだミクロ的な視点からの考察ではあるが、このような個々の社会的関係を起点として、例えばポトラッチのような贈与競争、あるいは現代資本主義世界に見られるような金銭という無機質を媒体とした支配と闘争の生々しい歴史が幾分かは容易に推測できることになるのではないか。¹²¹

7-4. 超越概念に関する考察

現代文学理論においては、超越的所記¹²²という用語が存在するが、たとえて言うならば、いささか安直ではあるが、神学が「神」という超越的所記を、法学が「正義」という超越的所記を、哲学が「真理」という超越的所記を中心とする記号群、テキスト群であると仮定するならば、文学は「愛」という超越的所記を中心とするテキスト群であったのではなかったであろうか。¹²³「愛は文学なしですますことができる（ことによると愛に対する根

えぬ小心な夢にすぎない！ああ、いまましい！』（14, 394）

¹²⁰ピーター・M.ブラウ（1974）を参照のこと。

¹²¹この事実を裏付けるには、例えば以下のベッカリーアの記述が参考となるだろう。「印刷術の発明のおかげでいたるところにひろまった哲学的真理は、君主とその臣民、そしてまた臣民どうしの間をむすびつける真の関係を人々に認識させてくれた。通商は活気づき、諸国のあいだには昔の戦争よりずっと人道的で理性的な戦争—ひらけた人類にふさわしい唯一の戦争—産業戦がおこされた。」ベッカリーア著、風早八十二、風早二葉訳、『犯罪と刑罰』、昭和35年、P20。

¹²²超越的所記 *transcendental signified*（デリダ）—ある特別な言語体系のために中心を提供する記号。中心として、それは安定性、存在、そして単一の透明な意味を促進させるのだが、それというのもそれ自身の意味は、他の如何なる記号にも依存しないからである。

「神」「正義」「真理」といった記号は、このように機能する。こういった「超越する記号」がなければ、宗教、法律、哲学のような、論証に拠る体系の伝統に則した概念は、一貫性の欠如と中心となる用語が欠けているせいで崩壊してしまうだろう。デリダは、記号はそのような立場には決して至り得ない。何しろ、記号は全て他の記号との関係の中で意味をもつことから、と主張する。これを実証する作業が、西欧思想の伝統となってきた領域を彼が脱構築する大きな部分を占める。（グレアム・アレン著、森田孟訳、『文学・文化研究の新展開：間テキスト性』、研究社、2002年、P269）

¹²³この仮定には、多くの反論が寄せられうると思われるので、あらかじめ記述するが、愛以外を主題（「平和」について、「友情」、あるいは「暴力」について等無数に）とした文学作品が世に多くあることは間違いない。しかし、そうであるとしてもなお、「愛」という超

強い不信の源には、文学があるということさえありえよう。』¹²⁴と語ったジョルジュ・バタイユの言葉が痛切に響く。

作家や詩人が、自分が生きた強い愛の出来事、その経験を書こうとするとき、その言葉が生じさせる〈意味のある現実〉は、けっして事象＝出来事そのものが真に現前することではない、ということに気付く。激しいパッションに揺り動かされた出来事、その経験は、名づけえぬもの、語りえぬものであるが、それでも作家、詩人は、言葉遣いを工夫し、文体を練り上げる仕方、そういう出来事として構築され、意味を発し、現実性を持ち、真実味を帯びるテキストを形作っていく。しかしながら、そういう現実とは〈出来事そのものが現前する〉ような現実ではない。どうしても模擬＝反復としての現前になる。これというの、作家、詩人が、言い表せないもの、語りえぬものを書こうとするからにはほかならないのだ。¹²⁵以上のことを踏まえたうえで、文学作品が、あくまでフィクション（虚構）であり、完全な意味での現実を捉え得ないという点を前提とした上で、更に作品を分析してみたい。

7-5. 「愛」と進化ゲーム理論

このような、各個人の主観的体験、心理的な遍歴を、完全ではないとしても捉えうるテキストとして、文学は一定の価値付けを得るものと思われるが、しかしながらその状況を客観的に観察すると、特に恋愛のプロットにおいて説明付けに最も容易であろうと思われるのは進化ゲーム理論である。1人の女性を巡って争う2人の男性というものは、古代ギリシャ¹²⁶から続く文学不滅の伝統であり、作品『カラマーズフの兄弟』においても同様であるが、文学にとって不変の永久的問題として扱われているこのテーマが生物学的観点から捉えられた時には、「メスをめぐって局所的な競争」¹²⁷を行うオスの戦略という観点から比較的容易に解を得ることができるようだ。もっとも代表的なのがタカ・ハトゲームであるが、これは2匹の動物が価値Vをもった資源をめぐって戦っているところを考えたときに、個体が2つの「戦略」のうちどちらか一方をとるものとしたものである。

この際のタカ戦略とは傷つくか相手が逃げ出すまで戦いを挑み続けるというものであり、ハト戦略とはまず誇示し、相手が戦いを挑めばただちに逃げ出すというものである。

越概念が文学の中心を占めているように、私には思われる。

¹²⁴G・バタイユ（2001）、P226、Georges Bataille. (1976). p. 141.

¹²⁵湯浅博雄（2004）、PP243～284、文学芸術の経験と〈真実〉より、要約。

¹²⁶例えばホメロスの『イリアスとオデュッセイア』等を参照のこと。

¹²⁷J. メイナード＝スミス著、寺本英、梯正之訳、『進化とゲーム理論—闘争の論理』、産業図書株式会社、昭和60年。

表 1. タカ・ハトゲームの利得

	H	D
H	$\frac{1}{2}(V-C)$	V
D	0	$\frac{V}{2}$

興味深いことに、グルーシェニカというヒロインを巡るポーランド人とドミートリー・カラマーゾフとの戦いに関しても上記のタカ・ハトゲームが成り立っている。

また、ドミートリー・カラマーゾフとポーランド人に加えてフォードル・カラマーゾフを加えて3者として考えてみると、タカ・ハトにブルジョア戦略を加えた三者のゲームであると想定することも可能である。ブルジョア戦略は所有者であればタカのように、侵入者であればハトのように振舞うものである。利得行列は以下のように示した。

表 4. タカ・ハト・ブルジョアゲーム

	H	D	B
H	-1	2	0.5
D	0	1	0.5
B	-0.5	1.5	1.0

この点からかんがみると、ヒロインであるグルーシェニカの「さつき一羽の鷹 сокоп が入ってきたら、とたんにあたし、がくんと気がゆるんでしまったの」(14, 396)という言葉は偶然の妙を極めているといえる。

ここまで考察を続けてみると、オスとオス、メスとメス同士だけではなく、男女間の関係なども含めた人間の全ての関係に「結合」だけではない「支配」、「闘争」の関係をも含めた闘争関係を指摘するモデル¹²⁸などにも確信を持たざるを得ない。

しかしながらこの進化ゲーム理論だけで愛という概念を説明し尽くすということは短絡的であろう。私自身の意見によると、愛というものの本質は、その他者尊重と自己所有化の欲望、他者との闘争などに迷い苦しむ苦悩の遍歴そのものにあるといえ、文学はそれらの愛の葛藤に苦しむ人間達の苦難の足跡を残しているという点においては肯定的な評価を与えることができるのではないか。

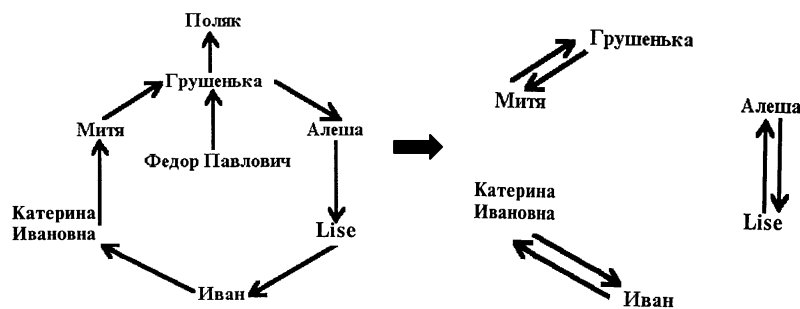
¹²⁸新睦人、三沢謙一編、『現代アメリカの社会学理論』、恒星社厚生閣、1988年、PP 117-146。

		Bの行為が相手の目標達成に対し	
		促進	阻害
Aの行為が相手の目標達成に対し	促進	結合	支配
	阻害	支配	闘争

図2

7-6. 社会的様態に関する考察

Robert L. Belknapは、作品内における社会的様態の変化を以下の図で説明している¹²⁹



G.C.ホーマンズは「バランスのとれた関係は持続する傾向にあり、アンバランスな関係はバランスのとれた関係へと変わる傾向にある」と指摘している¹³⁰が、文学のプロットの構造についても恐らくこのことはあてはまるだろう。

また、今回指摘しておきたいのが作品内における、登場人物たちのドラマチックな社会的様相の変動がカーニバルの祝祭空間を経て生じているということだ。

バフチンの書物である『ドストエフスキーの詩学』は、対話、作者の言葉の詩学と同様に、カーニバル論によっても著名な一冊であるが、バフチンによれば、カーニバルとは役者と観客の区別のない見せ物である。それは、通常の軌道を逸脱した生のことである。また、カーニバルの時には、通常の生の仕組みと秩序を規定している法や禁止や制限は、全て廃止させられる。社会のヒエラルヒーから生ずる不平等に基づくものが全て廃止させられるのである。そしてカーニバル特有のカテゴリーである、自由で無遠慮な人間同士の接触が力を得ることになる。また、カーニバルにおいては、外部の生活では万能の社会的ヒエラルヒーとは対立する、常軌を逸した場違いの、人間の相関関係の新しい様態が作りだされる、¹³¹と社会的様態の変動の契機として定義づけているわけだが、ロジェ＝カイヨワ

¹²⁹ Роберт Л. Белкнеп. Структура "Братьев Карамазовых". Санкт-Петербург. Академический проект. 1997. С. 85 - 86.

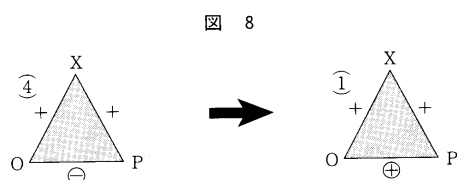
¹³⁰ ジョージ・カスパー・ホーマンズ著、橋本茂訳、『社会行動 その基本形態』、誠信書房、1978年、P92。

¹³¹ ミハイル・バフチン著、望月哲男・鈴木淳一訳、『ドストエフスキーの詩学』、筑摩書房、

が祭りと戦争との類似性について比較しているコンテキスト¹³²から考えてみてもまた興味深かろう。

しかしながらここで注目したいのが、この文学のプロットにおけるアンバランスな関係からバランスのとれた関係へと変わっていく過程において、少なくとも父親であるフョードル・カラマーゾフとポーランド人の将校の2人を、片や「父親殺し」、片や社会的な疎外というかたちで犠牲にしているという事実である。

ホーマンズのバランス理論によると、この関係はもとの交換で罰を与え合い、相互に嫌いあっている二人が、意見を交換したら、その意見が一致したという状況である。意見の一致が契機となって、相互に好意を持つようになる。例えば、「嫌いな人同じ意見で好きになり」(『万能川柳』)¹³³というミクロ社会学的見地から説明づけることが可能であろう。



しかしながら、作品内のこういった展開においても、古代の神話などと同様に、犠牲といういわば排除項の創出によって社会的解決を行ったに過ぎないという批判は免れえないであろう。

7-7. 罪の意識の形成

ベッカリーア¹³⁴はその著書『犯罪と刑罰』の「刑罰の起源と刑罰権の基礎にかんする諸

1995年、P248。

¹³²「ところで、この点で戦争と祭りは酷似している。両者ともに強力な社会的一体化の時代、道具・資産・組織の全面的な共有化の時代をつくりだす。…戦争と祭りにおいて、それらの活動分野は相互に依存しあうものとなる。何か厳格な組織構造によって規定されたひとつの場所を占めるものであるよりは、はるかに相互に重なりあうものとなる。こうしたわけで、戦争は現代社会における唯一の集中化の機会であり、通常なら各自に一定の自主性の余地をつねに確保してくれる一切のものが集団に徹底的に吸収される唯一の機会である。したがって、休暇や祝日よりもむしろ戦争こそが、集団的な沸騰状態である古代の祭期と比較されねばならない。」ロジェ・カイヨワ(1994)、P251、Roger Caillois. (1950). p. 223.

¹³³橋本茂、『交換の社会学—G.C.ホーマンズの社会行動論』、世界思想社、2005年、PP60-61。

¹³⁴ここで例としてベッカリーアを挙げているのは、ドストエフスキー自身が実際にベッカ

原理」の中で、刑罰の起源を以下のように説明している。自分の利益のためにだけこの地球上のさまざまな結合関係に結びつく諸個人が、人類のしだいに増加し複雑多様になる欲望を満たそうとする中であって結合して社会を生み、これに対抗する必要のある人間たちが他方に結合して、永遠の戦争状態が生まれる中で、たえまない戦いの状態に疲れた個人が自分の自由の一部分を差し出して残った自由を確保することを考え国家の主権が形作られた。刑罰はこのような中で社会をふたたびその昔の混乱状態におとし入れようとするこうした専制主義的な精神をおさえつけるに十分な力強さを持ち、感性にじかに作用する契機として、法の背反者にとってもうけられたものだとしている。

このような罪刑法定主義的な犯罪と刑罰という意味においても、『カラマーゾフの兄弟』では「父親殺し」という題材が大きなテーマであるといえる。

フロイトは論文「ドストエフスキーと父親殺し」¹³⁵の中で、まず最初に人類の一番重大で、一番最初の犯罪を父親殺しであり、幼児期の父親との保護を求めつつも母親を自分が占有したいという攻撃意識を持ち、なおかつ去勢を怖れるというアンビヴァレントな関係の中で、無意識のうちに自我と対立する超自我（罪の意識）が形成されると前提した上で、『カラマーゾフの兄弟』において、父親殺しの動機となる女性をめぐる性的な競争を指摘しながら、ドストエフスキーにおけるそのエディプス・コンプレックスの強さを指摘している。

先ほどのソドムの理想における解決としても、このエディプス・コンプレックスという点においても、ドストエフスキーは作品内においてカタルシス¹³⁶的解決を行ったといえるだろう。カラマーゾフ家の兄弟達によって父親殺しを行わせたうえで、上述したように少なくとも登場人物の1人に神という超越概念の超克を行わせているのだから。

しかしながら、作品内や実際の西欧世界と密接に関わるキリスト教的位相における罪の概念はそれだけではない。キリスト教は、イエスが十字架に掛けられて殺害されるという怖るべき出来事を1つの重要な原点にしている。しかしながら一方でイエスが見事に蘇り、＜復活＞したことを強調することにより、その怖るべき出来事をのりこえ、キリストの大きな無償の愛を呼びかけ、それを共有することによって愛の共同体を作り上げるのである¹³⁷。しかし、このキリストが経験したという愛の領域というものは自らの死と世界に対する無限の愛を交換する人格的な愛であるので、作家達が愛の経験をいくら工夫して文字化

リーアと浅からぬ因縁で結ばれていることによる。詳しくは江川卓著、『謎解き罪と罰』、新潮選書、2003年、を参照のこと。

¹³⁵フロイト著、高橋義孝他訳、『フロイト著作集 第三巻』、人文書院、1996、PP412-430。

¹³⁶カタルシス(1) アリストテレスが悲劇の人間に与える効用を説いた語として知られる。つまり劇中の事件や人物に対する共感が、人間の生理的、心理的鬱積を浄化、排泄するのに役立つという。(2) 精神医学では、抑圧された精神的な外傷を、言語や行動や情動として外部に発散させることにより、病気をなおそうとする精神療法の技術。浄化法ともいう。『哲学辞典』、平凡社、1987年、P242。

¹³⁷湯浅博雄『現代思想の冒険者たち11、バタイユ、消尽』、講談社、1998年より要約。

しても、それを完全には現前しえないことと同じように、この世に生き続けている人間にとってはキリストの行った愛の経験というものは、経験し得ないのである。言い方を変えてみると、自らの死と交換に、キリストは『神の子』という地位シンボル (status symbol) を獲得することとなる。その結果、キリストと比較してみるならば、生きている人間達は皆、善性に徹しきれない『罪びと』となってしまう。つまりは、キリストのような完全なる自己犠牲を行い得ない、つまりは死と交換に世界に対する愛を与えることのできないという劣等感にも似た、いわばキリスト＝コンプレックスのようなものが、エディプス＝コンプレックスとは異なるもう1つの罪の概念の根源なのではないだろうか。

ルネ・ジラルールにおいてはこの点で楽観的な解釈がなされていると言ってもよからう。彼は古代神話において迫害者の観点から神話を表現するためには、犠牲者の死 (生贄) という惨劇を必要とする必要性があったが、福音書におけるキリストの受難劇、つまりは犠牲者 (生贄) の視点から立った神話を対置することによって犠牲と迫害の構造を破棄し、無効にするという驚異的な作業を行っている指摘している。¹³⁸確かに聖書においては旧約聖書と新約聖書との間に、迫害者と犠牲者という視座の交代が存在しており、『カラマーゾフの兄弟』においても、社会的様態の変動の契機であるカーニバル空間を境にしてそのような迫害者と犠牲者、犠牲者と迫害者の交代がなされている。

作品の題名である『カラマーゾフの兄弟』のカラマーゾフ **Карамазов** という言葉には、カラ **Ка** (罰、神罰という意味の名詞) を塗られた **Мазов** (動詞塗る **Мазать** の被動形動詞、つまりは受身の形) という意味あいがかめられているのだが、作品『カラマーゾフの兄弟』では小説の最後は、「カラマーゾフ万歳! **Ура Карамазову!**」という少年達の台詞によって締めくくられている。この叫びは、人間を罪の共同体として包含した上で、それを礼賛するものであり、これがドストエフスキーの作品内において行った生の肯定的解決だと見られる。しかしながら今作品においては生の肯定という解決はなされているものの、エディプス＝コンプレックスとキリスト＝コンプレックスの両者にかんじがらめにされながらも生き続けねばならない人間の問題については未解決のまま取り残されている。恐らく、ニーチェは例えばドストエフスキーなどをヒントとして神殺しを行うことは出来たのだったが、彼は自らの死までキリストに打ち克つことは出来なかった。この問題は、現代においても未だ決定的な解決はなされていないようだが、少なくとも、ドストエフスキー自身もまたキリスト＝コンプレックスとエディプス＝コンプレックスのダブルバインドに苦しみながら人生を送ったのであり¹³⁹、彼の作品は、私達に彼の送った苦悩の遍歴の足跡

¹³⁸ルネ・ジラルール著、織田年和、富永茂樹訳、『身代わりの山羊』、叢書・ユニベルシタス、1985年、Rene Girard, *Le bouc emissaire*. (Paris. B. Grasset. 1982).を参照。

¹³⁹ドストエフスキーは流刑後の1854年2月のフォン＝ヴィ＝ジン夫人宛の書簡の中で、「キリストより以上に美しく、深く、同情のある、理性的な、雄々しい完璧なものは何一つないということです。単に、ないというばかりでなく、あり得ない、とこう自分で自分に、激しい愛を持って断言しています。のみならず、もし誰かが私に向かって、キリストは真理の外にある、正真正銘、真理はキリストの外にあると証明するものがあったら、私

を教えてくれる。

現在思想史においては、ドストエフスキーは実存主義の流れを汲む1人としてあげられていることが一般的であるが¹⁴⁰、以上の点からかんがみて、ドストエフスキーが有神論的実存主義者か、あるいは無神論的実存主義者かという問いについては、ドストエフスキーは無神論的キリスト教的実存主義者であったという答えが最も適当であろうと思われる。

8. 結論

言語は概念を形成し、その言語が織り重ねられて複雑で美的な諸概念を形成し文学が生まれる。名前の意味論というミクロの研究を行ってみると、主人公の名前に隠されたギリシャ神話のモチーフと小説に隠された大地への回帰というメタファーが浮かび上がってきた。一方で主人公のモデルに注目してみると、破滅的な詩人で土壌主義者であるアポロン・グリゴリエフが視野に入り、ドストエフスキー作品を構成する「ロマン的要素」が明らかになってきた。また、土壌主義によって農耕回帰のメタファーとドストエフスキー、アポロン・グリゴリエフが一つの糸でつながってくる。また、金銭を巡るトラブルは彼らを破滅的な状況へ追いやると同時に、それと対極をなす大地との和合への願いを強固にしていたようである。ソドムの理想とマドンナの理想という対立する概念を愛という概念によって合一し、幻想的なシーンを繰り広げると同時に、神という概念ですら結局欲望と権力に帰着するという事実を見せつけ、登場人物たちを過酷な運命に晒せた上で、人間の人格的な広大さをロシアと結びつけた上でカラマーゾフ性 КАРАМАЗОВЩИНА というメタフォリックな表現を用いて讃え上げる。ドストエフスキーの民族的な側面を軽視することは当然のことながら出来ないが、哲学者の列席において彼が実存主義者としての位置づけを与えられているのは偶然のことではない。

また、実際に我々が暮らす社会そのものにおいては、人口と同じだけの異なる自我が存在し、その異なる自我同士の性質・構成・交流なども進歩・多様化し、人智を超えた複雑な様相を呈していることを考慮に入れると、小説『カラマーゾフの兄弟』を含めた文学作品を絶対化し、マニュアル化してマクロ的な見本として考えることはナンセンスの域を超え、もはや危険であるといえよう。しかしながら、人間社会の最小単位であるところの個人の自我という点において、自己自身を捉えなおす機会、あるいは他者性の認識の機会として小説を用いることは有意義ではなかろうか。ヒュームは感情や性向、気質に関して民族を越えた普遍性があることを指摘しているが、¹⁴¹少なくとも今作品に作者自身が捉えた、普遍的な人間の本質に関するミクロ的資料としての価値付けは与えられるだろう。

は真理よりもむしろキリストと共にあることを望むでしょう」(28、176)と告白している。

¹⁴⁰例えばWalter Kaufmann, *Existentialism from Dostoevsky to Sartre*(New York, Meridian Books, 1989).を参照のこと。

¹⁴¹ヒューム『人間悟性に関する探究』第八部、第I章、第65節。

また、修士論文では、自分の中で無数の問いを繰り返し、テーゼ、アンチテーゼ、アウフヘーベンを繰り返して論考を進めてきたが、この論文もまた、他者にとって見ればただのテーゼでしかありえないことは自明であるが、とりあえず以上が修士論文の骨子である。

主な参考文献

日本語

上田閑照編、「無底—シェリング『自由論』における」『ドイツ神秘主義研究』、創文社、1982年。

ウオルィンスキー著、川崎俠訳、『カラマーゾフの王国』、みすず書房、1974年。

江川卓『謎解き罪と罰』、新潮社、1986年。

江川卓『謎解きカラマーゾフの兄弟』、新潮社、1991年。

エリアーデ著、堀一郎訳、『大地・農耕・女性：比較宗教類型論』、未来社、1968年。

小沼文彦訳、『ドストエフスキー未公刊ノート』、筑摩書房、1997年。

勝田吉太郎『近代ロシア政治思想史』、創文社、昭和36年。

カント著、篠田英雄訳、『純粹理性批判』岩波書店、1961年。

グレアム・アレン著、森田孟訳、『文学・文化研究の新展開：間テクスト性』、研究社、2002年。

五島和哉「ドストエフスキー創作中期における病气哲学の展開」

<http://www5e.biglobe.ne.jp/~kazuya5/dostoevsky.html>

ゴロソフケル著、木下豊房訳、『ドストエフスキーとカント』、みすず書房、1988年。

コンスタンチン・モチュールスキー著、松下裕、松下恭子訳、『評伝ドストエフスキー』、筑摩書房、2000年。

佐伯胖、亀田達也編、『認知科学の探求—進化ゲームとその展開』、共立出版株式会社、2002年。

佐伯啓思『貨幣・欲望・資本主義』、新書館、2000年。

坂庭淳史「ロシアにおけるシェリング哲学—その受容と展開について」『ロシア文化の森へ—比較文化の総合研究』、ナダ出版センター、2001年、P111～126。

J. メイナード＝スミス著、寺本英、梯正之訳、『進化とゲーム理論—闘争の論理』、産業図書株式会社、昭和60年。

シェリング著、西谷啓治訳、『人間的自由の本質』、岩波文庫、1951年。
 ジョージ・カスパー・ホームズ著、橋本茂訳、『社会行動 その基本形態』、誠信書房、
 1978年。
 新睦人、三沢謙一編、『現代アメリカの社会学理論』、恒星社厚生閣、1988年。
 竹田青嗣『エロスの世界像』、講談社、1997年。
 田中克彦『名前と人間』、岩波新書、1996年。
 ツルナイゼン著、丸川仁夫訳、『ドストエフスキー文献集成10巻ドストエフスキー研究
 一弁証法神学より観たる一』大空社、1995年。
 中村健之助編訳、『ドストエフスキーの手紙』、みすず書房、1988年。
 日本聖書教会編、『聖書』、1995年。
 橋本茂、『交換の社会学—G.C.ホームズの社会行動論』、世界思想社、2005年。
 橋本崇、『偶然性と神話：後期シェリングの現実性の形而上学』、東海大学出版会、199
 8年。
 ピーター・M.ブラウ著、間場寿一[ほか]訳、『交換と権力：社会過程の弁証法社会学』新曜
 社、1974年。
 藤瀬浩司著、『資本主義世界の成立』、ミネルヴァ書房、2004年。
 マルセル・モース著、有地享訳、『贈与論』、勁草書房、1962年。
 ミハイル・バフチン著、望月哲男・鈴木淳一訳、『ドストエフスキーの詩学』、筑摩書房、
 1995年。
 望月哲男「グリゴリーエフとドストエフスキー—土地主義の土壌」文集『ドストエフスキ
 イ』第二号、1981年。
 望月哲男「有機的批評の諸相—アポロン・グリゴリーエフの文学観—」『スラヴ研究』(no.37)
 1990年。
<http://hdl.handle.net/2115/5184>
 山崎時彦『保守主義の生成と発展—政治思想史』、昭和堂、1984年。
 湯浅博雄『聖なるものと永遠回帰』、ちくま学芸文庫、2004年。
 湯浅博雄『現代思想の冒険者たち11、バタイユ、消尽』、講談社、1998年。
 湯浅博雄『他者と共同体』、未来社、1999年。
 吉村善夫、『ドストエフスキイ～近代精神超克の歴史』、神教出版社、1965年。

英語

Walter Kaufmann. Existentialism from Dostoevsky to Sartre(New York:Meridian Books,
 1989).

Charles Passage. Character Names in Dostoevsky's Fiction (Ann Arbor,Michigan:
 Ardis Publishers 1983).

Geoffrey C. Kabat. Ideology and imagination : the image of society in Dostoevsky (
 New York : Columbia University Press. 1978).

Heinrch Stammeler. "DOSTOEVSKY'S AESTHETICS AND SCHELLING'S

PHILOSOPHY OF ART” // Comparative literature Vol. 7 (winter 1955) (Eugene: University of Oregon, 1955).pp.313-323.

Robert L. Belknap. The Genesis of the Brothers Karamazov (Evanston:Northwestern University Press Studies of The Harriman Institute, 1990).

Robert L. Belknap, The structure of the Brothers Karamazov (Evanston:Northwestern University Press, 1989).

Wayne Dowler. Dostoevsky, Grigorev, and native soil conservatism (Toronto Buffalo : University of Toronto Press. 1982).

露語

А.Григорьев. Лителатурная критика. С.171–172.

А.П.Осроват. заметки о почвенничество // сборник. Ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том4. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. С.168-173.

А.П.Осроват. К ИЗУЧЕНИЮ ПОЧВНИЧЕСТВА // сборник. Ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том3. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-.С.144-150.

А.Я. Шайкевич, В.М. Андриященко, Н.А. Ребецкая. Статистический словарь языка Достоевского. Москва. Языки славянской культуры. 2003.

В.Н.Белопольский. Достоевский и Шеллинг // сборник. Ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том8. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. С.39-51.

Б.Ф. Егоров. Аполлон Григорьев. Москва, Молодая гвардия. 2000.

В.В.Беляев.Имя грушенька в Братьях Карамазовых как антропоним // сборник. Ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. том10.стр.176-181.

В.Е.Ветловская. Идеал мадонны в Братьях Карамазовых // сборник. Ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том15. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. С.305-326.

В.Г.Селитренникова,И.Г.Якушкин. АПОЛЛОН ГРИГОРИЕВ И МИТЯ КАРАМАЗОВ. М-во высшего и среднего специального образования СССР. Научные доклады высшей школы. Филологические науки1(49). Москва. Высшая школа. 1969,1. С.13-24.

Гроссман.Л.П. Семинарий по Достоевскому. М.Петроград. Государственное издательство. 1922.

И.Д.Якубович. Братьях Карамазовы и следственное дело.Д.Н.Ильинского // сборник. Ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том2. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. С. 119-124.

Л.М.Рейнус. О прототипе Грушеньки из Братьев Карамазовых // Русская литература

- 1967но4 . Ленинград. Изд-во Академии наук СССР. 1967. С.143-146.
- Николай Бердяев. Миросозерцание Достоевского. Прага. 1923.
- Николай Николаевич Наседкин. ДОСТОЕВСКИЙ энциклопедия. Москва. Алгоритм. 2003.
- Николай Подосокорский. ЧТО ТАКОЕ «КАРАМАЗОВЩИНА»? // Достоевский и мировая культура. Общество Достоевского. Московское отделение Общество Достоевского. Комиссия по изучению творчества Ф.М. Достоевского Института мировой литературы им. А.М. Горького РАН- №. 14 .Москва.2001.С.304-314.
- Ф.М. Достоевский Полное собрание сочинений в тридцати томах. глав.ред. В.Г. Базанов. Ленинград. 1972-1990.
- Фридрих Вильгельм Йозеф Шеллинг. Сочинения в двух томах. Москва. Изд-во "Мысль". 1987.
- Ю.Д.Левин Достоевский и Шекспир // сборник. Ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том2. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-.

独語

F.W.J.Schelling, Werke. Hrsg.v.K.F.A.Schelling, Stuttgart, 1856-1861 VII.

仏語

- Georges Bataille, *L'histoire de l'erotisme, La Part maudite générale, tome II*, Oeuvres completes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard, 1976.
- Rene Girard, *Le bouc émissaire*. (Paris. B. Grasset. 1982)
- Roger Caillois. *L'homme et le sacré* Ed. augm. de trois appendices sur le sexe, le jeu, la guerre dans leurs rapports avec le sacré. (Paris. Gallimard, 1950)

補足.『カラマーゾフ兄弟』 あらすじ

十九世紀の半ば過ぎ、ロシアの田舎町に住む強欲で無信心で淫蕩な地主フォードル・カラマーゾフの家に父親にほうり出されてよそで育った三人の息子が帰郷する。先妻の子のドミートリイと、後妻の子のイワンとアレクセイである。なおそこには町の白痴の娘に生ました隠し子のスメルジャコーフが料理番として住みこんでいる。

ドミートリイは自分の遺産を横領した父と、町の商人の妾グルーシェンカのことで張りあい、いいなずけカテリーナから送金を頼まれていた三千ルーブリを二度にわたってモークロエ村でグルーシェンカと遊んで使いはたし、彼女の愛情を勝ち得る。2度めの豪遊の直前、グルーシェンカを捜しに行ったドミートリイは父の家で下男グリゴリーを誤ってなぐり倒して気絶させてしまう。かねて主人に深い恨みを抱いていたスメルジャコーフはイワンの「すべては許される」という虚無主義的な考えに惑わされて、その晩癲癇の発作を利用して主人を殺し、金を奪って、その罪を巧みにドミートリイに転嫁する。ドミートリイは恋が成就した瞬間に嫌疑を受けて逮捕され、裁判に付される。イワンはスメルジャコーフに教唆したという罪の意識から発狂する。発狂寸前に法廷に立った彼はスメルジャコーフにその前日自白させて取り戻した金を証拠に提出して兄を救おうと自分の教唆の罪を自白するが、被告に恨みを晴らしたいカテリーナの反証が物をいい、名弁護士奮闘も空しく被告はシベリヤ流刑を言いわたされる。¹⁴²

¹⁴²北垣信行訳、世界文学全集19、講談社1968年、…しおりより 全文引用。